

20周年記念

わがまち

あわに

平成3年2月

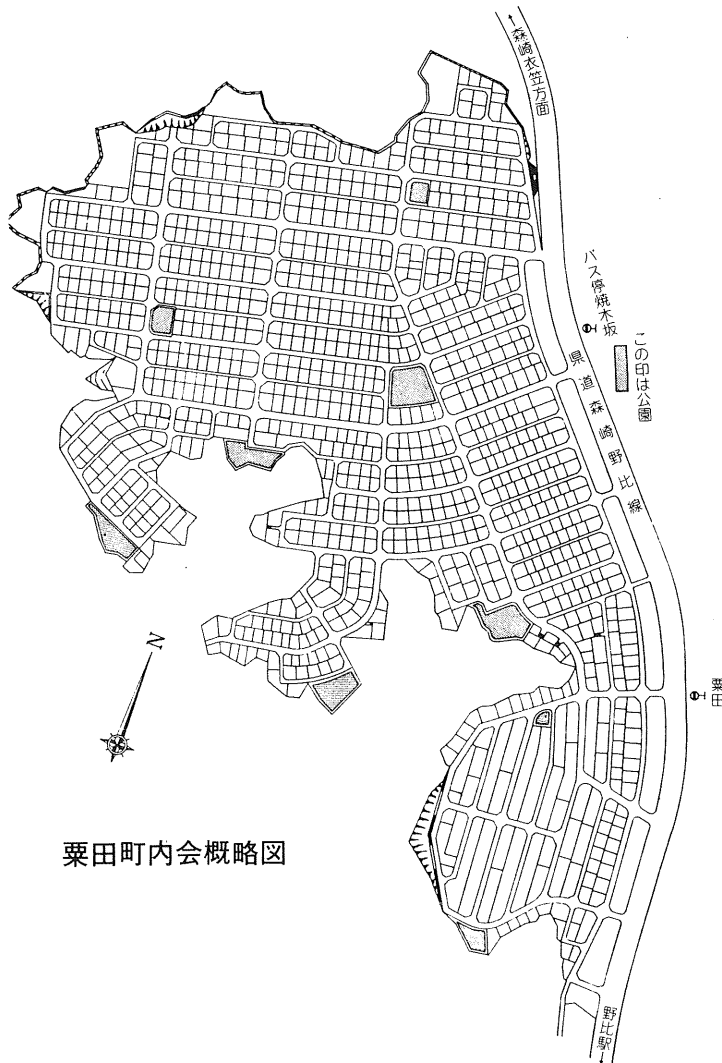
栗田町内会

20周年記念

わがまちあわた

平成3年2月

栗田町内会

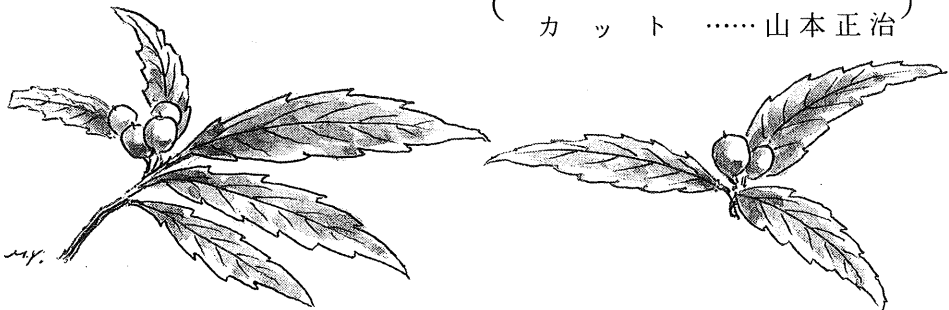


栗田町内会概略図

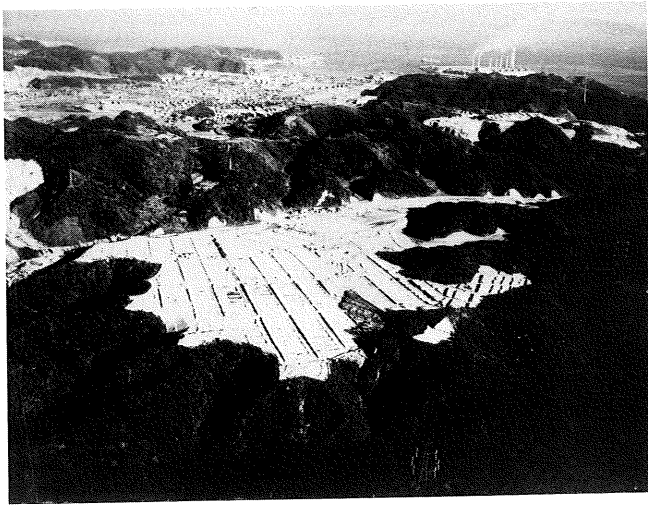
目 次

は じ め に	町内会長 近 藤 幸 雄	4
20 年 の 歩 み		6
栗田の将来展望		19
栗田道の今と昔		20
この地に移り住んだころ		22
団地の今昔・思い出すまゝ		23
ある古い地図からの連想		24
史跡をたずねて		29
栗田のむかし		32
短 歌		33
栗田町点景、六首		33
周辺 の 史 跡		34
栗 田 音 頭		38
町 内 会 旗		39
町内会の組織と各部の活動		40
世帯数と人口の推移		41
同好会・その他地域の社会活動		42
町内会の財産目録		43
栗田町内区画図		44～45
町内会年度別役員表		46～48
お わ り に		49

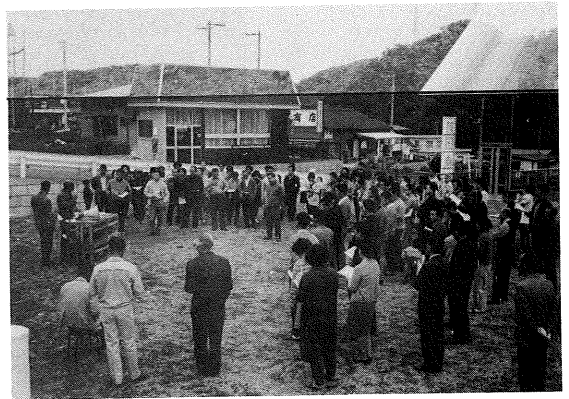
(表紙・中扉題字 江 上 一 雄)
カ ッ ト 山 本 正 治



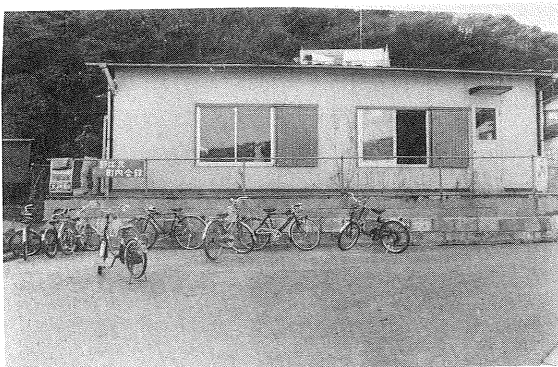
・・20年の歩みの中から・・



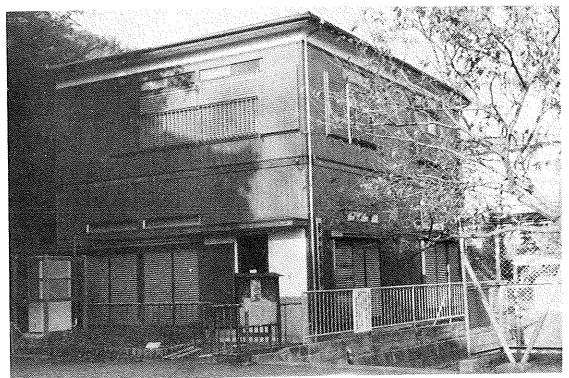
(昭和45年頃)



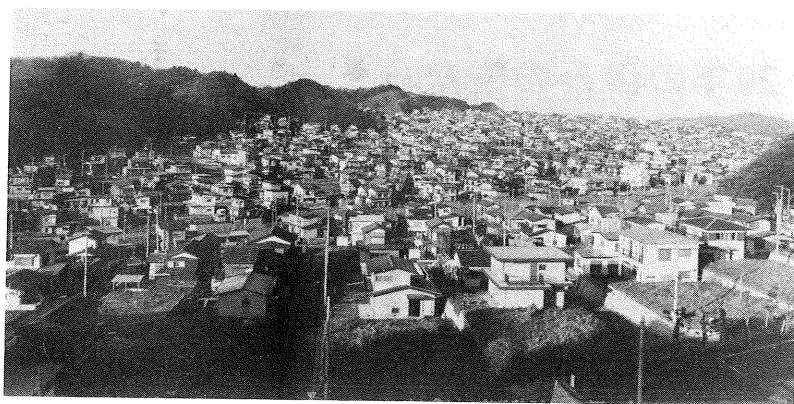
(青空総会 昭和46年4月)



(旧町内会館 昭和47年)



(現町内会館)



(昭和48年頃の栗田)



(町内会旗(正))



(納涼大会 平成2年夏)



(平成2年 新装なった中央公園)



(文化祭 平成2年11月)



(バス旅行 平成2年9月)



(納涼大会 平成2年夏)



(敬老の日 平成2年9月15日)

は じ め に

栗田町内会長 近 藤 幸 雄

栗田町内会が発足して20年を迎えました。この時を記念して理事会は記念誌を発行し、皆様にお届けすることにしました。皆様のご協力により、町内会諸活動はますます盛んになってきました。町内会員みんなでよろこびたいと思います。

栗田のまちは、平成2年4月1日、1,390世帯、人口4,589人です。昭和60年は1,346世帯で4,602人でした。この5年間は平均して毎年30戸の転出入があります。転入され、町内会に入会された方には、記念に「発足15周年記念、わがまちあわた」をお贈りして、早く町のようすを知っていただけるようにと努めておりますが、その残部も僅かとなり、25周年記念誌まで待てない程になりましたので、ここで15周年の心をできるだけ継承する形で、本誌発行となりました。

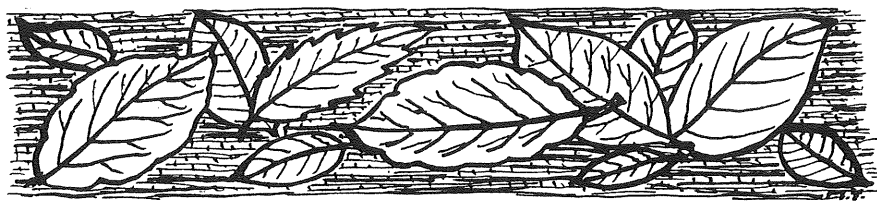
町内会は昭和45年1月18日、60世帯、294人で住民の総意をもって「野比北町内会」を発足させたところから始まります。成田会長を中心に7区7名の理事と役員の皆様は、町の開拓の時期に、あらゆる方面に走りまわりました。岩戸終点のバスを焼木坂まで、朝の通勤乗合タクシーを野比駅まで、夜は闇夜防犯燈を、自宅に電話がほしい、郵便ポストがほしい、ゴミ収集、汲取り、小学校は電車で長沢までは遠い、町内を舗装道路に、急病人、この頃の理事たちの忙がしさが見えるようです。昭和47年4月20日に平屋建30坪の町内会館が約260万円で落成し、48年4月栗田小学校が開校され、栗田はまちらしくなったと、お互いの挨拶で交されるようになりました。

昭和50年4月に「野比北町内会」は「栗田町内会」となりました。行政の住居変更によるものです。区も19区となり、世帯は1,006、人口3,618人の大きな町になりました。この頃から町内会のスポーツや文化活動が活発になりました。この年、町の標語ができました。五十嵐長儀さんの「明るく住み良い町づくり」と大鳥弘江さんの「町の和は、まずお早ようと笑顔から」です。昭和51年には山本正治さんの「栗田音頭」の作詞を小林淡動さんが作曲し、栗田の町の新しい歌がうまれました。8月には中央公園で納涼大会が開かれ、敬老の日には満70才以上の町内会員にお祝金が贈られました。11月には町内会館で文化祭、書道、絵画、写真、工芸など展示があり、婦人部が創めた「名物栗田のおでん」（はじめた時から名物という字がついたのです）は特製ということで評判になりました。この伝統はすごいもので、今年は600食を制限をつけて売りましたが、正午前に完売。昭和52年には敬老の日、会館に皆様をご招待、婦人部の腕もますます発揮されることとなります。昭和53年には、一日バス遠足がスタートし、理事の仕事は一段とふえ

ましたが、これら諸活動で、人の和が一層深まり、強められたことを忘れることはできません。

昭和55年6月8日、横山市長の参列を得て、現在の二階建45坪の会館が落成しました。1,450万円を要しましたが、町内会の皆様全員の醸金の結晶です。会館は両階とも午前、午後、夜間の部に分けて利用されていますが、本年は使用回数が月100回を超えることもある程です。このように諸活動が活発に行なわれて、他の町の方々からも、粟田がうらやましいと言われるようになりましたが、これこそ諸先輩、皆様の熱心な奉仕活動の賜です。

さて粟田の現在はどうかといいますと、人口構成が変ってきました。皆様ご承知の通りです。粟田小学校の生徒数は昭和53年2,190名が、昭和63年782名、平成元年617名、2年580名になりました。また青年の就職先をみると、通勤不可能の地域が多く転出しています。このことは初めから予測されていたことではありますが、これからの町内では、みんなが心から支え合っていく、社会福祉的な面を真剣に考えていくことが必要と思います。これからの“わがまちあわた”は、従来の諸活動に加えて、“お互いにあたたかく助け合う、心ゆたかな町づくり”に努めて、一層大きな輪となりますように、念願しております。



20 年 の 歩 み

〔昭和44年末～45年始〕

当時まだ5, 60世帯、県道は舗装のための工事中、一方では電話ケーブル埋設の工事とあって、雨天のときや雨後は水たまりと泥濘で、通勤通学は勿論のこと、日々の買い物も苦労の連続であった。バスは岩戸までしか運行されて居らず、而も1時間に1本位。第3第4工区は宅造中で、県道沿いの空地には造成機材や資材が山積し、更に飯場や事務所などの仮設家屋も立ち並んでいた。ハイランド県道側も、山を削り池を埋めての造成に昼夜をわかたぬブルドーザーの騒音であった。

明けて昭和45年1月10日、第百土地現地案内所に各世帯より1名宛参集、土地会社の営業部長より、現地及び将来の見通しについての説明と、タクシーの運行に伴う電車の乗車時刻並に帰駅時刻の調査があった。これによって通勤通学者（但し早朝に限る）のための足の確保が、少しばかりできるようになった。

翌1月11日、団地住民集会で町内会設立の急務について話し合い、設立準備委員会設置と6委員の決定をした。

1月18日(日)午後1時～3時、町内会設立総会、全60世帯、出席者41名、委任状16名。

当日は冬のさ中、野外では寒さが厳しく、風も強い。止むを得ず県道沿いに建っている国土開発KKの飯場の二階を借りて会場とする。造成機材の散乱する足場の悪い場所であったが、定刻には三々五々参集、狭い二階の一室、きしむ床板の上には古びた机とこわれかけた椅子が二、三脚、破れたガラス窓、散乱した資材や紙片、裸電球がわびしく揺れる火の気のない廃屋のような部屋の中、寒気がひしひしと脚もとから這い上る。しかし、集った人々の顔には、町内会設立への関心と熱意がみなぎって、すき間風の寒さを感じさせない。

議事の進行について、会則・活動内容・役員理事等の決定を見た。当面する諸問題として、(ア)バスの運行促進、(イ)街路灯の増設、(ウ)ゴミ・くみ取り対策、(エ)交番・ポスト・電話の早期誘致、(オ)郵便物の遅配対策、(カ)団地内案内板の設置などを掲げて総会が終了した。そして、ここに野比北町内会が誕生したのである。

〔昭和45年度〕

町内会発足後1年、その事業の成果は、(1)通勤者のためのタクシーのチャーター（昭45・3～46・1の11か月間）、(2)子供会の発足（昭45・4・5）、(3)ごみ集収週2回に、(4)青年部の発足（昭45・6・14）、(5)電話架設開始（昭45・6）、(6)防犯責任者制の設定（昭45・7）、(7)納涼大会開催（昭45・8・14～16）、(8)外灯の増設（昭45・12・16）、(9)郵便物遅配の解消、(10)町内案内

板・車の速度制限標識・ごみ集積所標示板等の作製設置, (11)会館用地確保のための奔走, (12)県道照明灯の新設(昭45・12), (13)会員名簿作成, (14)防犯防火・交通安全運動の講習会(春秋), (15)老人クラブ(緑会)発足(昭46・2), (16)野犬捕獲(保健所)実施(昭45・10と昭46・3), (17)町内美化運動の制定(毎月第2日曜日), (18)婦人部の発足(昭46・3・24), (19)ペルー地震・年末助け合い募金, (20)バスが岩戸から延長, 野比駅まで運行開始(昭46・2・1)などであった。

〔昭和46年度〕

事業の主なものを挙げると, (1)町内会館の建設計画, (2)街灯の増設, (3)納涼大会, (4)自衛消防団の結成, (5)ごみ集積所の増設, (6)横断歩道の新設, (7)町内に交通標識の新設, (8)小学校建設の促進等, その中で特筆すべきは町内会館の建設である。

町内会発足当初からの懸案であった町内会館の建設について, その実現までには幾多の難問や支障に会いながらも, 検討を重ね, 交渉を重ね, 役員理事の献身的な努力と町内会の皆さんの協力と支援とにより, 漸く実現することになった。

ア. 名 称 野比北町内会館

イ. 土 地 野比 1210 の 52 (市借地—現在地)

40.66 坪 (134.178 m^2)

ウ. 建 物 軽量鉄骨プレハブ平家 (大和ハウス施工)

22.9 坪 (75.53 m^2)

エ. 建築総額 2,635,465 円

オ. 資 金 通常経費, 基金, 特別予備金, 及び借入金, 補助金並に寄付金

町内会の事業とは別に47年1月には, プロパンガスの集中方式から, 全家庭, 都市ガスへの切替え工事が行なわれた。

〔昭和47年度〕

4月20日, ようやく町内会館が竣工した。あらゆる町内会の活動が, 会館を母体に行なわれるようになった。先ず, 新年度の定期総会が, 真新しい会館で行なわれ, 屋外にまで人があふれる盛況であった。内部整備も, 日を追って充実し, 子供会, 婦人部, 老人クラブ(緑会)等の活動は勿論のこと, 講演会, 講習会, 展示会等も活発に行なわれた。2月に県道の信号機が設置された。

〔昭和48年度〕

4月1日, 待望久しかった栗田小学校が開校し, 町内の学童は県道を横切って, 真新しい学校に通うようになった。それに伴う県道の歩道橋も, スロープ式を加えたものをと, 陳情を繰返し,

ようやく次年度着工の見通しとなった。また、町内での交通事故防止のため、十字路の擁壁に所有者の快諾を得て、百か所にも及ぶ標識が描かれた。

この年度内に起った大きな問題の一つに、全県的な視野から示された、地域開発・土地整備計画がある。さらにそれを受けて、横須賀市から用途地域の具体案が出された。それによると、県道沿いは第二住居地域、南西側の山林は市街化調整地域となっている。

吾々がこの地を選んで居住したのは、他にも理由はあるが、大方の人々は、緑の山々に囲まれたこの静かな環境を好んでのことではなかったか。吾々は自然保護、環境保全の立場から、強力な陳情を行なうことになった。町内の人々の力強い協力で、署名運動を展開し、陳情を繰返した。その結果、県道沿いは第一住居地域となり、南西周辺の山林は、個人の所有から売却されて社有地とはなっていたが、自然保護の立場から開発は許可しないことになり、その他散在する個人所有山林は保安林として存続することになった。

通報サイレン放送施設が完成し、非常災害時の通報に備えることになった。

また、空地の雑草（冬季は枯草で危険）の処置について、土地の所有者に依頼すると共に、消防署からも警告してもらう準備にとりかかった。

更に、最大の関心事となっていた、住居表示変更の問題は、49年6月乃至10月の市会で決定することになるので、ふさわしい町名を考えてもらいたいとの市の意向であった。いよいよ住民全体に呼びかけて、親しみやすく、書きやすく、この地の風土にも合った、而も、他の地区にない町名ということで応募してもらった。町名候補57種、そして投票、検討、さらに投票の末、栗田（あわた）と決定した。（昭和50年3月1日より新住居表示実施予定）

〔昭和49年度〕

住居の大きな関心の的である「住居表示」の実施の年に当たっているので、4月21日開催の定期総会に於て、さきに実施したアンケートの結果に基づき、改めて正式に町名を「栗田」とすることに決定した。そこで直ちに市当局に上申し、その後数度の公聴会、委員会の議を経て、市議会に提案、承認可決の後、昭和50年3月1日から新町名で発足することとなる。

次に7月8日未明の台風8号による集中豪雨は、短時間に例年の約2か月分に相当する250ミリの雨量をもたらし、横須賀市全域に亘って床上、床下浸水、がけ崩れ等大きな災害を及ぼしたが、わが栗田は立地条件の良さもあって、大した被害もなく、無事災害を免れ得たことは、誠に幸いであった。

次いで、かねてより設置してある緊急時通報サイレンの有効利用について、一定時刻に音楽を放送し、特に夕刻遊んでいる子供達に帰宅の意味も含めて、午前6時、正午、午後6時（11月30日から翌年2月末日までは午後5時）の3回放送することに決定、9月の取付け完了以降実施することとなった。

また、大きな事業の一つである町内会発足 5 周年記念の「町のあゆみ」を編集し、昭和50年 1 月末に完了、3 月に発行した。

〔 昭 和 50 年 度 〕

当町内会も昭和45年 1 月発足以来一応の節目である 5 年間も経過し 6 年目を迎えることとなった。町名も町内会設立後暫くは「野比」であったが、昭和50年 3 月 1 日住居表示の実施により「栗田」と変更になったので、4 月20日開催の定時総会で

1. 町内会名を「野比北」から「栗田」に

1. 町内区画を15区画から19区画に

1. 庶務的事項のほか町内の財産である土地・建物・備品・什器等を管理する部として総務部を新設

した。次に 5 月定例理事会でシンボルマーク入り町内会旗制定の件が審議され公募した結果、13 区五十嵐長儀氏の作品が、また 7 月に公募した「明るく住み良い町づくり」の標語として 1 区大鳥弘江様の「町の和はまずお早ようと笑顔から」が入選と決まり、いずれも 8 月実施の納涼大会の会場で発表並びに表彰式が行なわれた。次に本年度から町内居住の高齢者に対し敬老祝金を、新成人に祝品を贈ることとなり、9 月15日敬老の日に満70才以上の高齢者63名に敬老祝金として金一封を、1 月15日成人の日に新成人24名に祝品を贈呈した。

次に12月25日、緊急放送用チャイム建設用地として第百土地株式会社から野比 123 番地58、地目山林 166.7 m^2 を購入した。

51年 2 月の定例理事会で決議された「栗田音頭」公募の件は 6 区山本正治氏の作品が採用され 51年度納涼大会で発表するべく振り付け並びに作曲を依頼することとなった。

次に表彰関係としては、① 6 月 1 日に町内会館で成田町内会長が町内会設立後引き続き町内会長として町の発展に寄与された功績に対し町内会から感謝状並びに記念品を、② 8 月14日、14区川内惣助氏が納涼大会会場で自宅周辺及びバス停附近の除草清掃等町内美化運動を積極的に推進協力した努力に対し町内会表彰を、③ 10月30日、栗田町内会が県立音楽堂で開催された「昭和50 年交通安全県民総ぐるみ大会」で神奈川県警本部長より交通安全優良町内会として表彰されたほか、④ 51年 1 月20日、町内会長が市主催の市内町内会長会の席で町の発展に尽力した功により横須賀市長から表彰された。

そのほかこれまで同好者の集りであった民謡・詩吟・囲碁・将棋・フォークダンス・卓球・柔軟体操・ソフトボール・書道・絵画・バレーボールが正式に同好会として認められた。なおその後、盆栽会・箏曲の会が加わった。

上記のほか、①町内会として栗田地区テレビ共同受信組合（テレビの見えにくい地区の人で構成）の設立に協力した。②町内会活動の活発化に伴い将来に備え本年度から町内会館改築準備金

を積み立てることとし、取り敢えず本年度分として金50万円を別途積み立てた。

〔昭和51年度〕

本年度は昭和51年3月中央公園に公衆用トイレの建設が始まったが、これは町内会として設置方陳情したものでなく一部の住民から市に対し直接設置してほしい旨の要望があり市が予算化して建設に着手したものであるが、汲み取り式のため近隣居住者より臭気及び保健衛生上の見地から中止してほしい旨の要請があり数度の検討会を開き水洗化にするよう陳情したが、その結果は現時点では工事中止は出来ないが出来得る限り早い機会に水洗化するよう努力する旨の確約を得た。

次に8月12・13・14日の3日間に亘り中央公園で納涼大会が盛大に実施されたが、その会場で先に公募採用された町内会旗（正・副）及び栗田音頭が披露されたほか商店会主催による子供用樽みこし二基も町内を練り歩き子供達に大変喜ばれた。また秋には町内作品展が開催され一般並びに子供会から書・絵画・写真・手芸品等が出品展示され、婦人部によるおでん・綿菓子の安売りもあり大好評裡に終了した。

次に9月15日敬老の日に満70才以上の高齢者65名に敬老祝金を、1月15日成人の日に新成人30名に祝品をそれぞれ贈呈した。

次に表彰関係としては、①7月18日、町内会館で加藤副会長が町内会発足以来役員として町内会の発展に尽力された功績により町内会から感謝状並びに記念品を、②8月18日、栗田子供会が県立青少年センターで優良子供会として、また11月6日、横須賀市から、更に11月22日、浦賀交通安全協会・浦賀警察署から交通安全運動に協力した廉によりそれぞれ表彰された。

そのほか町内会館改築準備金として本年度分金70万円を別途積み立てた。

〔昭和52年度〕

本年は、ここ数年来の懸案になっていた町内会館改築の件であるが、12月開催の定例理事会で諸物価値上がり傾向にある折柄出来得る限り早い機会に工事に着手した方が良いとの結論に達し、会館改築準備委員会（会長・副会長・会計・各部の部長及び顧問で構成）を設け細部について検討することとなった。

次に恒例の納涼大会は8月11日から13日までの3日間行いう予定であったが、13日は生憎の雨となり中止の止むなきに至り誠に残念であった。

9月には野比中学校が開校され、それまで久里浜中学校に通学していた当団地居住の生徒は新設の学校で授業を受けることとなった。

次にこれまで理事が届けていた敬老祝金を本年度からは該当者を町内会館にお招きして祝賀の宴を催しその場でお渡しすることとなり、9月15日敬老の日に満70才以上の高齢者60名を招待し

たところ35名の出席があり、婦人部の方々の接待に加え民謡同好会による歌と踊りのアトラクションを交え極めて盛会裡に終了し大変に喜ばれた。

次に11月1日、町内会館に待望の電話が設置され非常に便利になった。

11月20日には町内会館と公園広場を会場にして町内文化祭を催し大人子供計265点の出品作品を展示し、アトラクションとして民謡同好会の三味線及び尺八の伴奏による粟田音頭ほか数曲目の踊りのほか、婦人部によるおでん・綿菓子コーナー・衣料品販売等あり大好評であった。

次に表彰関係としては納涼大会の夜、14区川内惣助氏に町内会から町内美化運動推進の功により感謝状と記念品を（なお同氏は10月8日、京浜急行電鉄株式会社から、更に2月15日市制記念日に横須賀市からも同様の趣旨による表彰を受けた）。10月25日、栗田町内会が長谷川四郎建設大臣から都市公園の美化と都市緑化の努力に対し表彰を、3月には副会長大竹庸悦氏に対し町内会から町の発展に尽力された功績に対し感謝状と記念品を贈りそれぞれ表彰された。

また本年度から野比中学校卒業生に北下浦青少年推進の会名で記念品を贈ることとなり、該当者50名に記念品を贈呈した。

右のほか町内会各種同好会に本年度から助成金が交付されることとなった。町内会館改築準備金は本年度分として金70万円を町内会費より支出し別途積み立てた。

〔昭和53年度〕

本年度事業計画の中で最も大きな関心事は町内会館増改築の件である。本件については既に昭和50年度から毎年改築資金を積み立てるほか昭和52年12月18日発足した会館改築準備委員会で慎重に検討中であつたところ構想がほぼまとまつたので、53年度の終り頃（54年2月頃）臨時総会を開くべく12月24日町内会だより第71号で内示したところ、現状の敷地では増築部分の基礎を打つことが出来ないとのことで急遽総会開催を取り止め更に検討することとなった。

次に兼ねてから通勤者の利便を図るため京急に陳情中であつたバスの増発が認可になり、4月1日から早朝焼木坂発野比行5時42分、野比駅発焼木坂方面行終バス22時は運行されることとなった。次に継続陳情中であつた中央公園設置の公衆用トイレの水洗化が10月に完了した。納涼大会は8月3日から5日まで実施され、台風の接近に伴い天候が懸念されるところであつたが大したこともなく無事終了することが出来た。特に本年は子供達による「のど自慢大会」が催され大変喜ばれた。次に町内会初めての試みとして11月10日、紅葉の美しい秩父多摩国立公園秋川溪谷に日帰り親睦バス旅行を催したところ89名の参加者があり、バス2台に分乗し澄み切った青空の下楽しい一時を過ごした。

次に11月19日実施の文化祭には大人・子供計325点の書・絵画・写真・手芸・盆栽等が出品され、部門別に人気投票の結果1位から3位までに賞品が贈られた。

表彰関係としては10月30日、婦人部が昨年度中に実施した諸活動に対し横山市長から、11月22

日、当町内会が交通安全の啓蒙と技術指導に顕著な功績ありとして浦賀警察署長から表彰された。

（本件については同時に町内会長及び交通部長に対しても同趣旨の表彰があった。）

以上のほか町内会館改築準備金として本年度も金70万円を町内会費より支出し別途積み立てた。

〔昭和54年度〕

前年度に引き続き会館改築準備委員会で検討中であった町内会館改築の件は構想もまとまり、昭和54年12月2日臨時総会を開催し会員多数の出席を得て慎重審議の結果、次年度以降に於ても極力諸経費を節約して借入金返済に充当し会員の負担を軽減されたい旨の決議を付して賛成者多数で次の通り可決された。

1. 増改築はする。改築規模は一部鉄骨入り木造二階建とする。
2. 工事費は14,000,000円（追加工事費を含め金14,302,605円）資金計画は積み立ての
のほか三浦信用金庫より返済期間2年間の予定で金7,000,000円を借入れる。会員には
55年1月より満2ケ年を限度として一世帯当り1ヶ月金300円を負担していただくこと。
3. 工事請負業者は横須賀市長沢315番地栗橋建築とする。
4. 市に対しては出来得る限り速やかに補助申請をする。

右により2月10日上棟式も終り以後の工事日程としては屋根葺き、外部工事、内部造作工事の順で4月中旬には完成の運びに至る予定で工事に着手することとなった。

次に恒例の納涼大会は8月2日から4日まで開催し、中日には子供みこし二基町内を巡行、最終日には子供のど自慢大会・フォークダンス等もあり盛会裡に終了した。

11月には文化祭を開催したほか多数の参加を得て三保ダム・中川温泉郷にバスによる日帰り町内親睦旅行会を催した。

表彰関係としては5月19日、加藤副会長が衣笠行政センターで催された全市町内会長の集いで永年に亘り町内自治活動に尽力した功により横須賀市長より表彰された。

そのほか町内会館改築準備金として本年度も町内会費より金200万円を支出した。

〔昭和55年度〕

本年度は待ち望んだ町内会館の改築も終り4月末に引き渡しを受けたので、6月8日午前10時から横須賀市長ほか関係者多数の御参列を得て新築落成祝賀会を催した。当日は生憎の悪天候であったが町内会役員並びに婦人部の方々のお骨折りにより無事盛大に終了することが出来た。以後町内会活動が活発順調に行なわれることとなった。

次に恒例となった町内親睦旅行は11月6日、参加者80名、2台のバスに分乗して久里浜からフェリーで千葉に渡り南房パラダイスを経て花と海女と灯台の街白浜に遊ぶ南房総日帰りバスの旅を催し、当日は気候温暖快晴で楽しい一日を過ごした。次に納涼大会は7月31日から8月2日ま

で（最終日は降雨のため中止），文化祭は11月3日，完成した町内会館で書・絵画・写真等86点を展示しアトラクションも交え盛況裡に終了することが出来た。なお本年度からは出品者は大人に限定することとなった。

12月19日は待望の浦賀警察署栗田駐在所が開所され大坪巡査が着任され栗田のほか岩戸方面の治安確保に当てられることとなり，意を強くした次第である。

表彰関係としては10月14日，栗田子供会が交通安全運動に協力した功により神奈川県交通安全協会から，10月22日，成田会長が同様の趣旨により神奈川県警本部長から表彰を受けた。

そのほか町内会館改築費として本年度分町内会費より金 150 万円を支出した。

〔 昭 和 56 年 度 〕

本年は，昭和55年1月から2年間の予定で協力していただいた町内会館建設借入金の返済は，成田会長の精力的な募金活動の結果多額の寄付金が集ったことと会員皆様の絶大な御援助等により56年3月までの15ヶ月間で完済することが出来たので，4月25日開催の定時総会で会長からその旨を報告したほか，町内会規約の一部改正を行い本年度から基金（当町内会が無から発足したため備品等購入に充てるため町内会設立頭初から会費のほかに金 100 円宛負担していただいたもの）の徴収を取り止めることとした。

次に好評のため恒例化した町内親睦旅行は7月12日，81名の参加を得て秩父長瀬の探勝と舟下りを楽しんだ。次に納涼大会は7月30日から8月1日までの3日間開催したが，初日雨で中止となったほかは好天に恵まれ盛大であった。文化祭は11月3日に開催され，会員力作の諸作品が展示されたほかアトラクションとして民謡・踊り・詩吟・フォークダンス等があり，そのほかおでん・綿菓子等も販売され賑やかなうちに終了することが出来た。9月15日敬老の日には町内会館に該当事86名中63名が出席され，民謡・踊り・詩吟のほか浦賀警察署藤堂様の手品等が披露され大変喜ばれた。また本年から新成人を町内会館に招待してその席上でお祝品を贈ることとなり，1月17日（日），多数の参加を得て賑やかにお祝いをした。

表彰関係としては11月，栗田町内会が防犯活動及び防犯連絡所の整備拡充に協力したことにより浦賀防犯協会・浦賀警察署長から表彰された。

〔 昭 和 57 年 度 〕

本年度納涼大会は7月29日から31日まで3日間に亘り盛大に催されたが，本年は商店会が力を合せて作った本格的な子供みこしのほか，山車（だし）も参加することになったため町内会とは別個にみこし世話人会を設けることとなり，町内会から4名（会長・副会長・文化部長），商店会から4名，その他一般の町内会員から4名の委員で構成することとし，以上の代表に15区加藤春治氏が選ばれみこしの先導をして町内を巡行した。次に9月19日，町内親睦日帰りバス旅行を

催し、参加者51名で初秋の昇仙峡に出掛け溪谷美とぶどう狩りを楽しんだ。また11月3日には文化祭を催し、参加作品85点が展示されたほか民謡・踊り・琴・詩吟等のアトラクションのほか婦人部によるおでん及び商店会による大廉売市が開かれた。

表彰関係としては栗田子供会が5月に神明小で実施された交通安全子供自転車大会で優勝し7月実施の県大会で見事10位に入賞し表彰されたほか、12月に交通安全活動で関東管区警察局長から表彰された。

〔昭和58年度〕

本年最大の関心事は初めての試みである「ゴミ分別収集」が実施されることとなり、7月8日及び同月11日の2日に亘り午前午後計4回の説明会が開催され、いづれも多数の主婦が出席し熱心に質疑応答がなされ、8月1日から次のように実施された。

- | | | | |
|--------------------|---------|--------|-------|
| 1. 燃せるゴミ | 毎週月・木曜日 | } 現在 { | 火・木・土 |
| 2. 燃せないゴミ（プラスチック類） | 毎週金曜日 | | 水 |

次に恒例の納涼大会は7月28日から30日にかけて3日間、文化祭は11月3日午前10時から午後3時まで行われた。いづれも参加者多数あり極めて盛大であった。

町内親睦日帰りバス旅行は9月11日、参加者134名という今までにない多人数で伊豆河津七滝めぐりと河津温泉郷探訪の会を催し、天候にも恵まれ老いも若きも一つになって楽しい一日を過ごし町内の人々との親睦に大きく寄与することが出来た。

また11月20日には町内会館に対し業者による白蟻等の害虫駆除消毒を、12月4日には婦人部を中心に町内会役員有志による町内会館の大掃除を行なった。

次に2月、岩戸団地集中浄化槽跡地利用計画として自治活動センター（仮称）の建設を市に陳情した。

表彰関係としては12月22日、当町内会に対し多年に亘る警察行政への協力に対し浦賀警察署より感謝状が贈られた。

〔昭和59年度〕

本年は町会設立後満15周年に当るので6月開催の定時理事会で「15年誌刊行」の件が決議され、具体的作業の進め方として編集委員会を設置することとなり、委員として成田会長、岡、山本副会長、倉持会計、各部の部長、八木沢・加藤両顧問のほか全役員が参画して町内皆様の意見を聞き資料とした上で発行することとし、町内会だより第138号及び第139号で

1. 栗田に関する随想・記録その他建設的な意見
2. 町会の過去の行事写真のほか栗田近辺の風景写真

等を公募し、1月末発行の予定で鋭意作業を進めた。

次に恒例の納涼大会は8月2日から4日まで中央公園で実施され最終日には子供みこし・だしの町内巡行もあり盛大に実施された。

敬老祝賀会は9月15日、町内会館に該当者をお招きし115名中66名の方が出席され、同好会による民謡・舞踊・詩吟に加え流行中のカラオケも出て楽しさいっぱいの雰囲気で終了した。文化祭は11月4日、町内会館で絵画・書道・写真等多数の応募作品を展示したほか盆栽愛好会の丹精された立派な作品の出品もあり、また婦人部のおでんの販売もあり大好評であった。更に会館二階では老人会（緑会）の有志で組織している煎茶の会の先生並びにお弟子さんによるお茶席が設けられ特に喜ばれた。このお茶席は新しい町内会館が出来た昭和55年から毎年文化祭当日に催されて来たものである。

町内親睦バス日帰り旅行は9月30日、参加者96名、バス2台で奥多摩鳩の巣溪谷方面に行き晴天の下楽しい一日を過ごし町内の人々との親睦の和を広げることが出来た。

〔 昭 和 60 年 度 〕

本年度の納涼大会は、8月1日より3日までの3日間、中央公園において催された。恒例のレコードによる盆踊りには、初めて町内のカラオケ歌自慢が加わり夜の公園は大変なにぎわいとなった。この粟田が「ふるさと」となる子供達におなじみになった神輿山車にも大勢の参加があり、西瓜やお菓子がふるまわれ、元気な子供達の声が町内に流れた。

納涼大会を初めとして、恒例となっている町内の各行事は、商店会、婦人部、子供会、緑会、各同好会、及び役員の献身的な奉仕・協力なしにできるものでなく、粟田町内のまとまりの良さを表わしている。

次に9月15日には敬老祝賀会が町内会館で行なわれ70名の方々が出席された。婦人部手作りの料理、弁当、飲物を召し上がっていただきながら、同好会による民謡・踊り・大正琴などを楽しんでいただいた。なお、本年度、粟田在住の70才以上の方は、男性57名、女性72名、計129名であり前年の115名を13名上回り、粟田にも高齢化の波がよせている。

9月29日には忍野八海と勝沼ぶどう郷への日帰りバス旅行が行なわれた。残念にも悪天候ではあったが実り多い秋の甲斐路の景色を楽しんだ。11月14日には町内会館に於て文化祭が開かれ、町内の趣味人の力作・盆栽・絵画・書道などが展示された。出品者39名、出品数52点を多数の人達が鑑賞し芸術の秋を満喫していた。

〔 昭 和 61 年 度 〕

粟田の恒例となった各行事は、粟田に住む人達にすっかりおなじみになり、その季節季節には例年通り各行事が実施されている。7月31日から8月2日には中央公園に於て納涼大会が行なわれ、盆踊り・カラオケ・神輿、山車の巡行など会員の協力によって無事に終わっている。

敬老祝賀会は、9月15日、町内会館で開かれた。70才以上の対象者 142 名のうち83名の方が出席され、婦人部の手料理に舌つづみを打ち、カラオケ・民謡などで楽しいひとときを送っていただき来年の再会を約して散会となった。

文化祭は、「あわた、みんなの文化祭」のテーマのもと、創作発表の場を提供し、会員相互の親睦と、創作活動のより活発な発展を願って、11月3日に開催され、89名の方々の出品があった。例年大好評の婦人部のおでん・盆栽愛好会の即売会のほか、商店会の朝市には大勢の人達が集まり、にぎやかな1日となった。又、本年度より栗田文化祭にあたり、栗田町内ですぐれた活動をしてこられた、団体、個人を対象に送られる、「栗田文化賞」が設定され、第1回目はスポーツで優秀な成績をおさめた栗田ゲートボールチームと、ヤングファイターズのソフトボールチームが受賞した。

〔昭和62年度〕

栗田の納涼大会も回を重ねて、本年度が12回目となり7月30日から8月1日の間、中央公園に於て行なわれた。夜の盆踊りとカラオケ大会は、相変らずの人気で会場がいっぱいになり、子供会、商店会、体育振興会による夜店も賑っていた。子供神輿、山車は子供達期待の行事で午前午後、合わせて390名が参加し町内をねり歩いた。

敬老会は本年度で11回を数え、9月15日、町内会館で行なわれた。70才以上の対象者 155 名中83名の方々が出席され、例年おなじみの婦人部の手作り料理、民謡などで楽しんでいただいたが、年々参加者が多くなり、町内会館がせまく感じられる様になった。

又これも11回目となる栗田文化祭は、11月8日に開かれ、写真・書道・絵画・魚拓・パッチワーク・鎌倉彫・手芸・彫刻など出品数 168 点を数え、文化祭も栗田の町に根付いた。他にも、お茶の会・盆栽の即売・囲碁の会・名物のおでんなど楽しみも増え、終日、町内会館はにぎわっていた。第2回目になる栗田文化賞は8大会に出場し全て優勝するという、栗田ポートボールチームと、ボランティア活動10年を続けた栗田水曜会に送られた。尚、栗田水曜会は昭和63年2月15日、上記の理由により市長賞を受けている。

9月27日、恒例の日帰りバス旅行で城が崎公園、大涌谷へ行き会員の親睦をはかっている。

〔昭和63年度〕

本年度の納涼大会は、7月28日から30日迄の3日間中央公園で盛大に催された。今回が13回目になる納涼大会は、町内の夏の行事として会員にすっかりおなじみになり、子供神輿、山車の参加者 460 名、又盆踊りは夜店客を含めて毎夜約 400 名が集まり賑やかな夜になった。今年は、約30名の外国人がゆかた姿で踊りに加わり国際色も豊かでなごやかな風景であった。

町内会の親睦バス旅行は、9月25日八ヶ岳・清里高原へ行き、高原の澄んだ空気とぶどう狩り

りで初秋の1日を楽しんだ。

敬老祝賀会は9月15日町内会館で開かれ、対象者166名中79名の方が出席して民謡・カラオケ・合唱等でお元氣な姿が見られた。例年の婦人部の心づくしの料理も召し上がって戴いた。11月6日には町内会館で文化祭が催され、書道60点の他絵画、手芸等100点余りが展示され、来場した人達に好評であった。外では盆栽愛好会による作品の展示即売が行なわれ、いつもながら人気を呼んでいた。特に今年は子供会の人形劇とバトントアラ-の公演があり見物の人達の笑いと大きな拍手が続いた。当日、粟田文化賞が山本正治さん（文化活動）と新倉清次さん（スポーツ活動）に贈られた。

〔平成元年度〕

本年度5月17日付で地域の自治活動と福祉の増進に長年奉仕された山本正治氏に市長から表彰状が贈られた。

次に岩戸自治活動センターが岩戸バス停近くの集中浄化槽跡に建設されることになり粟田町内会からは建設準備委員として近藤会長、小室副会長が5月21日理事会で決定された。8月に運営管理委員が選出され平成2年末には完成される予定である。

次に8月3日～5日迄第14回目の粟田納涼祭が例年の通り行なわれた。夜の踊り3日間、山車売店菓子のプレゼント等賑やかに楽しく行なわれた。

次に9月15日第13回敬老祝賀会が町内会館で催され、対象者（70才以上）192名中83名が出席、町内会館は寿司詰め状態になった。しかし近藤会長がお招きした野毛山節の片山先生の熱演に暑さも忘れて熱中し予定時刻を過ぎる有様であった。

次に町内会バス遠足は「美術鑑賞」と「ぶどう狩」が9月24日（日）、72名参加のもとに行なわれた。朝6時40分に出発し、県立山梨美術館では「ミレー」のデッサン類を鑑賞し、ワイン工場見学ではワインをお腹一杯試飲し、「ぶどう狩り」では甘くておいしい、新鮮な葡萄を腹一杯に詰め土産にたくさん持って帰った。

次に13回目文化祭が11月5日（日）に行なわれ恒例の文化展が会館で開かれた。

彫刻・書道・手芸・絵画・写真・盆栽、42点が出品され、公園では盆栽愛好会の会員が150点を出品し、又婦人部の名物「粟田のおでん」と盛会でした。なお当日粟田文化賞として

桜井忠三さん－文化の部　　水野光雄さん－スポーツの部　に感謝状が贈られた。

〔平成2年度〕

第20回町内会総会が5月13日に開催された。出席50名、委任940名、会員数1,247名、の79%で総会成立、平成元年度の事業、会計報告が承認され、平成2年度の事業計画と予算が決定した。

本年度は、町内会設立満20周年にあたり、「20年誌刊行」が決議され、編集委員会を設置した。山本顧問を編集長に、近藤会長、小室・江上両副会長、会計、総務部理事全員、加藤緑会会長、

岡顧問、中村斉委員が参画し、町内の皆様よりの原稿を募集して発行することとし、編集を行った。

恒例の納涼大会は、台風10号接近の影響を受けながらも新装成った中央公園で8月2日～4日、賑やかに実施された。連夜600名以上が来場し、幼児と小学生の「だし」に250名、付き添いの父母80名、「子供みこし」には、小学生の有志30名が参加した。途中俄雨でみんなびしょ濡れになり、大人が引き継いで帰着というハプニングもあったが、盛況の中楽しく終了した。

敬老祝賀会は、今年から冷房の効いた会館で、9月15日盛大に行なわれた。我が町の満70才以上の方は203名で、祝賀会には72名の方が出席され、婦人部心尽くしのお料理に赤飯弁当、贈呈のキンピールで乾杯し、野毛山節保存会会長片山浪先生の熱演と指導で元気な歌声が流れ、時間を忘れる楽しいひとときを過ごした。公園では盆栽愛好会の作品展があり、即売会も大好評であった。

町内親睦バス日帰り旅行は、9月30日81名が参加、中川温泉信玄館で温泉につかり、大きな？ニジマスをお土産に、天候は生憎とは言え楽しい一日であった。

文化祭は、11月11日町内会館で約300人の方々が、町内の芸術家達による絵画・書道・盆栽などの力作を鑑賞した。特に子ども会の大富士の絵は、文化祭初のコラボ大型作品。今年の出品者は50名で、作品数は200点以上となった。婦人部の栗田名物無農薬野菜のおでんは大好評であった。例年の煎茶のサービス、そして今年は野比中学音楽部のブラスバンド演奏も加わり盛り沢山。芸術の秋、食欲の秋を満喫した。当日、永年に亘り体育振興会の活動を推進してこられた根崎稔さん、梶原泉さんのお二人に栗田文化賞のスポーツ賞が贈られた。





栗田の将来展望

2-42-12 小 原 信 男

栗田町内の世帯と人口は平成2年4月現在北下浦行政センター調べによれば、世帯数1,390軒で人口4,590名とのことです。これは横須賀市のほぼ百分の一の規模と云われています。

町内創立20周年を経た今日、わが町あわたの近い将来を想像して見よう。

住民の高齢化は、町の活性化の一環として大きな問題として浮びあがってくることでしょう。町としても高齢化に対応した社会教育・社会体育・社会福祉の在り方が求められることになるでしょう。

現在多数の高齢者の方々は、会を造り各方面に亘って活躍中です。将来はさらに一層の拡充と新たな視点が生まれ、活躍の場が増し、より充実したものとなることでしょう。

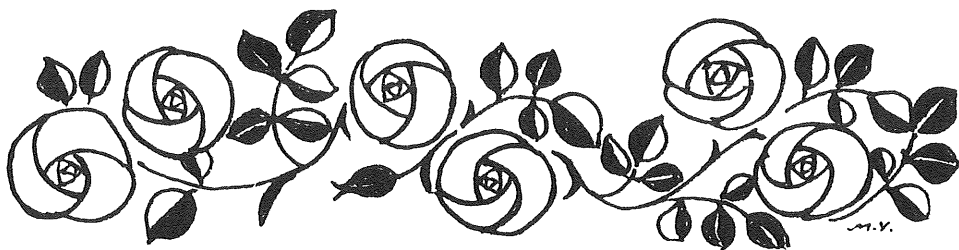
高齢者社会を的確に捉えることは困難であるが、高齢者の方々は好ましい生き方を求めているのではないかと、町はこの好ましい生き方にお手伝いすることが増加するでしょう。

現在は勿論のこと、早晚高齢者に達する方々は、より一層社会変化と、環境に適応した考え方を採り入れた、地域社会での過ごし方を計画されることでしょう。町はこの計画の実現に向けた構想を作り、町内皆さんの理解と協力を得て、さらに行政から適切な助言と援助等も受け、高齢者にふさわしい社会教育・社会体育・社会福祉ボランティア活動が、誕生するのではないのでしょうか。

社会変化と環境変化につれて、高齢者の好ましい生き方も変化が予想されます。町は時代を先取りし、好ましい生き方を高齢者と一緒に模索して行くのではないのでしょうか。

一方町の文化活動も盛大に行なわれ、内容も密度の濃い活動が期待される。また青少年活動は一層充実し、青少年育成に貢献するものと信じたい。

時代と共に世代交代が進み、町を背負う方々も、新世代の皆さんに変わって行ない、わが町栗田の将来展望は町の発展と高齢者のバラ色をおおいに期待したいものです。



粟田道の今と昔

1 - 9 - 6 山 本 正 治



三浦郡誌に「野比大作より西北方山間に入り、久里浜村岩戸に出で、衣笠村を経て横須賀市に至る里道を粟田道と称し、最も枢要なり。」とあり、利用度の高い近道であった。現在の県道野比森崎線が、おおむね昔の道に当たる。

昔、野比から巾2米足らずの道が、うねうねと北へ向って通じていた。島田バス停附近で左手の野比川が丘にかくれ、右手は雑木の生い茂った小高い丘で、その奥に池があり土地の人は「半の田の池」（約千坪）と呼んでいた。これは大作、下、中村の田畑の灌漑用水であったが、昭和45年頃ハイランドの宅造と共に埋められ、学校用地に予定されていたが埋立地で地盤軟弱なため現在地（粟田小学校）と交換された。今はハイランドへの登り坂となっている。

更に進むと、道に沿って水田が続き粟田側、右手のハイランド側にも水田を見ることができた。土地の人は「あわだ道」或は「あだ道」と訛ってよんでいた。この農道は遠く三浦の毘沙門・松輪あたりから、漁師や農家の人々が早朝から一日がかりで、漁師は下浦でとれた魚をザルに入れ天秤で担ぎ、農家の人はキャベツ・大根などの野菜を籠に背負い、また肥料（当時は人糞）をとりに牛車、馬車、リヤカーなどで佐原・大津・横須賀（佐野方面を指す）方面へと出かける往来であった。きつね・むじな・いたち或は時に追いはぎなども出没した寂しい道であったという。

更に粟田バス停より少し北へ向った右側に地蔵尊があった。200年前頃からのものと言われている。今は下りの島田のバス停附近石垣の上に移されている。「この地蔵尊は粟田の地蔵様と申し、粟田街道を旅する人々の安全や歯痛・頭痛その他の諸願に靈驗ありと敬れ、諸願成就の御礼に貝殻を捧げる習しがある。昭和46年粟田の土地開発で田中家当主が此処に御移祀申し上げた次第」と碑に書かれている。

この地蔵尊のあった右手はハイランド、左手はわが町粟田、共に海拔100米前後の小高い丘の起伏は広葉樹林におおわれ、粟田側のそのはざまには水田が奥まで連なっていた。

当時は現在の焼木坂バス停近くのハイランドへの登道は無く、やがて道は焼木坂を下り始める。右手に庚申塔があり、そこから山へ入る道は峠を越えて久村から久里浜へと通じていた旧道である。

坂を下ったところが岩戸、新編相模風土記に「岩戸村（以波止牟良）江戸ヨリ十八里、四方山岳連リテ岩壁モテ門戸ヲ立テルニ似タリ、故ニ村名起ルト云。戸数十二」。

また三浦古尋録には「此村ハ山谷ノ処ニシテ白雲常ニ帯、樹々路ヲ爽テ伐木ノコダマニ響キ、松風流水ノミ聞キテ物静ナル山家也」とある。左に流れる岩戸川を渡った奥、満願寺のある谷間

には、大昔から明治時代の末頃までは十二軒の部落であった。岩戸から道巾もやや拡がり、岩戸川に沿って道は佐原方面に通じていた。栗田道に沿って残っていた早稲田、焼木坂、妙ヶ谷、山田、島田などの地名や小字からも、このあたりの往時のようすを伺い知ることが出来よう。また、わが町栗田は青垣山めぐる自然環境に恵まれ、四季のうつり変りをそのままに、我々に心の安らぎを与えてくれている。そして今もおこのあたりには、次のような野生の動植物が見られる。

(鳥類) すずめ、からす、とび、つばめ、あかもず、ひよどり、つぐみ、うぐいす、ほおじろ、きじばと、めじろ、しろはら、あかはら、こじゅけい、じょうびたき、しじゅうから、せきれい、ひばり、ふくろう、ほととぎす、れんじゃくなど

(小動物) いたち、うさぎ、むじな、たぬきなど

(植物) くさぎ、うつぎ、はりぎり、まてばしい、やぶにつけい、きぶし、さかき、たぶ、とべら、あおき、いぼた、はぜ、やまざくら、おおしまざくら、たらのき、やぶこうじ、やまもみじ、すだじい、しろだもなど



この地に移り住んだころ



1 - 25 - 10 加 藤 正 元

私が、当時住んでいた横浜駅西口近くの横浜市神奈川区の公務員宿舎からこの地に移り住んで来たのは昭和44年11月9日(日)であった。居は真新らしくまあまあであったが住環境の方はお世辞にも良好とは言えなかった。例示すれば、

1. 家が少なく街が暗かった。
1. 野犬が多く町中を咆哮散歩していた。
1. 横浜方面への通勤は北久里浜・岩戸間の折り返しバスに頼るしかなく、岩戸バス停野比駅間は未舗装で歩いて行くには時間がかかり特に雨の日には道はドロコとなり短靴では歩けないほど、タクシーを利用しようとしても車体が汚れ町中を運転するのに困るとの理由で乗車を拒否される。
1. 第三工区は建設中で山肌が削られブルドーザーが土煙りを上げながらごう音を立てて走り廻っていた。
1. 現在のハイランド方面及び栗田小学校の辺りは未造成で緑濃い山であった(栗田小開校は昭和48年4月1日)。

その頃の或る寒い日の早朝一番電車に乗って三崎通り矢方面に磯釣りに行くべく家を出た。空は暗く2, 3星がまたたき寒い日であった。平素はごう音を立てて走り廻っているブルドーザーの動きもなく勿論人車の通りもなく怪しいくらい静かな淋しい朝であった。丁度造成中の団地入口附近(島田寄りのテニスコートのある辺り)まで来かかった時右手造成中の空地の中に一軒の家がポッカリと浮び上り、電灯の光の中に私同様釣仕度をした男の人が妻君らしい人の見送りを受けて家を出ようとしているのが目に入った。その時はホホウ俺と同じに釣りの好きな人も居るんだな!! ぐらいの軽い気持ちで通り過ぎ島田の辺りまで来た時に、待てよ今見た辺りは造成中で家など何もないところではないか、と気付きそれまでに再三再四土地の古老からこの辺りは深い山で細い栗田径が通っており狐や狸又はムジナがよく人を化かしたもんだ、等と聞いたことを思い出し急にゾット悪感が背筋を走った。

当時淋しかったこの附近も今では1,300世帯の大団地に発展し往時の面影は何も残っていない。時々そんなことを思い出している今日このごろである。

団地の今昔・思い出すまゝ



1 - 6 - 17 塩 満 嘉 夫

S 44年11月下旬より、47年8月上旬まで住んでいた粟田に、本年7月中旬より18年振りに、再び住むようになり、今昔の感一入であります。

当時は、岩戸団地はまだ造成中で、ダンプカーなどの工事用の車の出入りが多く、焼木坂の登り口の、岩戸団地の入り口の辺りは、何となく埃っぽく感ぜられ、粟田団地の中はまだ空地の方が多く、団地の入口から中央公園もよく見渡せて、夜になれば外燈が点々と並んで浮び綺麗で、如何にも新開地というムードが漂っている反面、何か落ちつかない感じもありました。

最初移り住んで印象的であった事は、東の山の紅葉と夜の星空の美しさでした。自然の摂理というものの、常緑樹と、落葉樹の紅葉がほどよく混在して、夕陽を浴びて美しさが、心に焼きついて、他所に移っても、秋になるとなつかしく思い出されました。又秋の夜空も、久しく忘れていた星の多さに子供達が、歓声を上げたのが思い出されます。

団地周辺の道路の発達は目を見張るばかりで、最初は野比駅までの県道もまだ砂利道で、雨が降れば処々に水溜りが出来ていたような記憶があります。バスの本数も当然のことながら少く、通勤等で駅にでる時の不便なことは大変でした。特に北久里浜駅までの道路とその周辺部の変化は、見違えるばかりで、以前通勤時に朝夕通った道であるのに、18年振りに通った時は、何処が何処やらさっぱりわからず、浦島太郎になったような気がしました。車の通行量も当時とは比較出来ない位増え、今夏体験した夜半の暴走族の騒音等、静寂だった当時は夢想だにしなかった事があります。

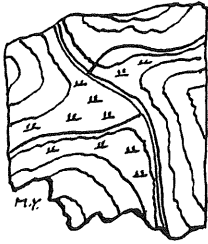
食糧品や日用雑貨品等も団地には商店もなく、土日の休みを利用して、久里浜駅前や衣笠の商店街に買い出しに行き、大量に買い込んだものでしたが、今では何でも団地の中で手に入り、不意の来客等でも困ることもなく、つくづく住み易くなったものだと感じます。子供等の学校も、明浜小学校や、北下浦中学校までバス通学で、バスに乗りおくれた時など暗くなって帰ってくることもありました。

電話も申し込んでから半年位してついたような気がします。先方からの連絡方法は、遠方からの至急連絡は電報、こちらからは、公園の中にある公衆電話まで行かねばならず、冬の寒い時などはすっかり体が冷えてしまった事など、今はなつかしく思いだされます。

最初に町内会を組織して下さった成田さんが、自宅で役員会を開かれる時など、ご自分で1軒1軒役員の家を廻って連絡して下さっておられ、大変ご苦勞しておられたような気がします。

このような諸先輩方のご苦勞と、ご努力のお陰で、このような住みよい、すばらしい団地になったのだと感謝しつつ、変らない皆様方の暖いご援助とご指導に甘えながら暮らしております。

ある古い地図からの連想



1 - 35 - 2 坂 本 繁 夫

私たちが住んでいる粟田 1, 2 丁目は、かつて野比と呼ぶ地域の一部であったことは大抵の方が知っていると思う。野比とは野原が 2 つ並んだありさまを形容した地名だとする説があるが、航空写真や地形図でそれらしく見えるかと思い、ためつすがめつしてみたが得心のいくような結果は得られなかった。もっとも野比ではなく、元は野火の字を当てていたとする説もあるので一概には言えないようである。

野比という地名が初めて文献にあらわれるのは、明治 4 年 (1871) のことである。それよりさき、明治 3 年に施行された郡県制のもとで、当地域は三浦郡の浦賀村に属していたことが記録に残っている。

明治 4 年は戸籍法が発布された年にあたりそれに伴う新たな行政区画として、在来の郡町村とは別に区制が設けられ、三浦郡は 10 区 77 箇所より成っていた。野比村の名は、その第 6 区の中の一村として登場している。因みに、同じ区内には、内川新田、八幡久里浜村、佐原村、久村、衣笠村、須軽谷村、長沢村の名が見えている。これらの地名は、いずれも現存しており、夙になじみの地名であろう。

ところで、現在私たちが住まいしている地域は、東ないし東南に傾斜した地形から知ることができるように、大楠山から東南に向け派生した山陵が、火力発電所のある旧千駄崎につらなる一角を占めている。三浦半島の地形の特徴の例に洩れず、この地も開発前は入り組んだ谷戸の発達した所であり、谷奥まで水田として利用されていたようである。じじつ、開発から免れて今日に残る谷戸の奥には雑草木の茂るにまかせた階段状の廃田が散見され、よくぞここまでと思うほど昔の人の稲作に傾けた情熱に感動すらおぼえる。こうした水田の多くは明治以降の開発によるものであろうが、内川新田の開発の歴史にみるように江戸時代の人の手になるものも少なくないと考えられる。とにかく温和な風土に恵まれ、古くから人の営力の及んだ所だったに違いない。

小なりといえ野比川は当地域の唯一の水系である。この川は大楠山から連なる山稜を東西に分かつ形で南北に流れ、今日の県道沿いに流路が形成されていた。否、むしろ逆で、野比川沿いに県道が自然発生的につくられていったというべきであろう。話は少し横道に逸れるが、野比川が北から南へ流れるのは地形から見て自然のなりゆきである。ところが粟田地内を出て島田へ至る中間地点で流路が西へ直角に近い屈折を見せる。そして再び南に向きを変え、海に注ぐことに気づくであろう。皆さまの中には、このあたりを北武断層という第一級の活断層が通っていることをご存知の方も多いことと思う。この断層は国立久里浜病院から野比中学校、島田 (四ッ田) 付近を通り、相模湾側の長者ヶ崎を結ぶ線上を通るもので、断層を境に北と南では地質が異なる。

また、断層の北側（栗田側）は東へ、南側（野比側）は西へずれる活動性をもっている。したがって、この付近で野比川の流路が変曲するのは断層の活動によって西の方へ地盤がずれた結果によるものと私は考察している。

県道野比－森崎線は昔も今も重要な交通路であることに変わりはない。この道の前身は栗田道と呼称されていたことはよく見聞きする。けれども、どこからどこまでが栗田道だったかについて正確に記述したものはまだ見ていない。それはさておき、私達が移り住むまでのこの道は、両側から山の迫る淋しい所だったといわれている。時折り聞く古老の弁によると、狐狸も出没したというから、とても豊かな自然に恵まれていたようである。

私が移り住んだ昭和45年（1970）頃は県道の東側（ハイランド側）には、まだ谷戸田が残っていたが、その1年後には開発によって跡形もなく消え去ってしまった。県道の西側、すなわち今日の栗田1、2丁目、すでに整地の済んだ後で、往時のたたずまいを知るさすがは何もなかった。

先日、栗田から長沢附近の開発前の地理を知る必要から、市の図書館を訪ね、ほぼ私の要求に適う資料として古い地形図（後掲）を見る機会を得たので、それを参考に雑駁な考察を加えてみたいとおもう。

その一つは1万分の1の地形図である。かなり古いものだが、肝腎の測図、発行年次の印刷されていたあたりがちぎれて散逸していた。けれども火力発電所の用地埋立以前であること、京急電車の線路が久里浜までしか通じていなかったことなどから、昭和30年以前のものであることは明らかである。もう一つは3千分の1の地形図で昭和31年に市役所が発行したものである。この方には字名が入っている。

さて、それらを見ると野比川の流路は大凡いまの県道に沿うように北上し、やがて西北に大きく開けた谷戸に向けて大きく曲がり、源流につらなっていた。すなわち、今日の目標をかりていえば、県道沿いに北上してきた野比川は、田中医院のあたりで西北に向きを変え、谷戸（沢）を貫流し、沢の源頭は岩戸第2ポンプ場付近にあった。県道をさらに北にたどり、焼木坂バス停から50米ほど行った所にある8米道路あたりからは西に開けた谷戸があり、水田となっていた。したがってこの道路は、谷戸の地形をそのままなぞるように建設されている。これら2つの谷に挟まれたところは、高さ70米内外の丘陵になっていて、中央公園にあたる場所はその尾根の部分に相当する。丘陵地にはスダジイ・シロダモ・タブ・ヤブニッケイなどの暖帯常緑樹が繁茂していたことであろう。そのたたずまいは、さいわいにして尾根筋に建設された送電線路に沿って、今日に残された樹林帯にしのぶことができる。因みに、ポンプ場付近の高さが103米、県道の海拔は40米だから、63米の標高差がある。いまの栗田と県道を挟んで隣接するハイランド側も同様の地形であるが、島田バス停あたりから北東に開けた大きな谷戸があり、今日のハイランド地区の西半部の地形を規定していた。しかし、埋立により今日では往時のすがたの片鱗もない。ただ、

粟田富士とかいう異名をとる送電鉄塔の立つ丘だけが、取り残されてあたりの変転ぶりを見下ろしている。

ここで地形図に表記されている字名について気づいたことを記しておこう。

まず野比駅の方から北へ向かうと、島田、その西に四ッ田という名が見られる。いずれも長沢に属する字名である。島田を過ぎると道は少し登り坂となり、やがて下り坂となって粟田地内に入るが、このあたりの県道の東側に風早の地名が見られる。このあたりは両側から山が迫ってきて峠のような地形なので岩戸の方から吹いてきた北風が野比方面に吹き抜けるときに隘路にさしかかり、吹出し口のようになり、風の強い所であったことがその名より知れる。これは私の勝手な当て推量だろうか。

風早のすぐ北隣り、今日の粟田小学校付近にあわ田の地名が出てくる。けれど粟田という表記ではなしにあ巴田という字を当てている。これは地図作製者の誤記とも思えないが、地元の人々が言葉としてだけ呼びならわしてきた地名を文字にして表わすときに生じた誤謬かも知れない。さらに言えば、あ巴田の巴という文字もはっきりそれとは書かれておらず、むしろ巳に近い。書体も活字体ではなく、竹を削って作った烏口で書いた書体に近い。ここで奇異に思うのは、今の町名の起こりになった最も由緒正しかりき地名が、小学校の建っている、ごく狭い範囲の字名にすぎず、そればかりか県道の東側、ハイランド地区の字名であったということである。ともあれ、新しい町名の採用にあたっては、町民から公募して少くとも人気の高かった候補の中から選択したはずだから、これまで私は粟田という字は山田という字名に匹敵する地域をカバーするものと解釈してきた。それゆえ些か腑におちないところである。このあたりの事情をご存知の方はご教示ねがいたい。

県道の西側の大半は山田という字名になっている。ただ当時の地図の不徹底さによるものか、字の境界が示されていない。したがって、どこからどこまでが山田なのか明らかでないが、察するに、岩戸第2ポンプ場と中央公園を結んだ線とその延長線の両側が山田で、北側が妙ヶ谷である。結局、大凡であるが、粟田1、2丁目の旧字名は北半が妙ヶ谷で南半は山田ということになる。

ここで焼木坂というバス停の名の由来について考えてみたい。焼木という字名が初めて文書に表出するのは、明治21年に岩戸村が村名として登録されたとき、村内の8つの小字の一つとして登場する。石ヶ^{やと}谷、宮ノ下、向ヶ^{やと}谷、琵琶首、早稲田、焼^{やけ}木、半縄、大前田がそれである。それでは焼木という地名はどの辺にあったかということになるが、現在目標物がないので特定しにくいけれども、その昔、岩戸の児童らが久里浜にある学校に通うのに通学路として使用していたという小道が目印となろうか。バス停を通り過ぎて岩戸の方へ向かうと急な坂道となる。この坂が焼木坂というわけだが、昔からそういう地名があったのかということになると何の根拠がないので甚だ心許ない。私にはどうもバスが通い出してから命名にすぎないように思えてくる。とも

あれ、この坂の中程に青面金剛童子の石像（庚申塚）が立っていて、そこから東の方に入る小径がある。この角に民家が1軒あり、その門前を右に見て曲がると右手に畑、左手には階段状に開拓された水田や畑がのぞまれる。そして眼前には頂に鉄塔を乗せた大きな山が立ちはだかる。この谷戸の中心にあたるところに焼木という字名がある。現在は佐原の地内である。昔は民家があったのかどうか寡聞にして知らないが、地図上には記されていない。バス会社の方が、どのような経緯と識見によって焼木坂という名をバス停に与えたか知りたいところだが、地理的には何の無理もないし、所を得た命名だと思う。ところが、資料としている地図上で、またまた疑問が生じた。昭和31年の地形図では、字名に焼木ならぬ焼水と記されている。先のあ巴田の一件といい、これまた看過しがたい疑問を投げかけている。私はこれこそ地図作製者の誤記ではないかと思っている。しかし、確証あつてのことではないので問題提起にとどめておく。

石渡正氏の監修した「久里浜風土記」（昭和59年）によると、久村にある等覚寺という古刹の縁起について述べたくだりに、「この寺の背後の山を矢切の峯という。北久里浜－野比線のバス停の名があるが、これは矢切りに改める必要があろう」という見解が記されている。矢切の発音が焼木に転訛しても不思議はない。また、どなたかが訛ったり、誤記をおかし、それを後世に伝えることも大いにあり得よう。しかし、寺の裏山とはどの範囲の山を指すのか、矢切りという地名または山名の出典が示されていない、等覚寺から焼木まではゆうに2千米はあり、一山を越した地理的關係にあり、望見することは不可能である。こうした観点から、そのままでは氏の所説には首肯できない。ぜひその論拠を教えてくださいたいと思っている。

焼木の坂を下り、信号の所に来ると開けた感じになるが、このあたりを早稲田という。粟田、山田、そして早稲田というように、この辺には田圃に因む地名が多い。これは当地域に限ったことではないが、とりたてて何の変哲もない山間の地点を社会生活上の必要から呼び交す際には、もっとも手っ取り早く土地の特徴を表わすネーミングが用いられる好例を示している。山田は文字通り山の中の田んぼであつたろうし、粟田は地味に乏しく、作物としては稗か粟くらいしか穫れなかったのにちがいない。

昔のことを回想するようになると年齢のせいだという面白からぬ説もあるかと思えば、故きを温ね新しきを知る、という格言もある。筆者は粟田の前身のことは何も知らないで、それについて述べても回想とは言えず、資料の渉獵も十分とはいえないので連想ということにした。昔の青年もいつまでも若くはない。ここらあたりで一世代前の粟田のことを記すことも、住みなれた郷土への功德と思い、独断にみち、まとまりのない拙文を弄した次第である。文中多くの誤りを含んでいることと思うので、識者のご叱正をたまわりたいと思っている。

（1990年12月8日出稿）



古い地図 ($\frac{1}{10000}$)

野比川が北から南へ流れ

県道がそれに沿っている。

谷あいには水田が散在している (谷地田)

道路の西側は粟田, 東側はハイランド。

史跡をたずねて



2 - 28 - 8 岡

健 治

経済大国と各国から云われるようになった日本の国内では、いろいろと物資が豊富になり、なに一つとして不自由を感じない程になった反面、人と人とのつながり、心の温かさがだんだんうすれて来た感があります。子供も、大人も、老人もみんな一緒に楽しく暮らせる明るく幸せな、わが町栗田の将来を願っている栗田住民の一人です。三浦半島のほぼ東の中央部に位置するわが町栗田は、妙ヶ谷と共に昔から地名であったが、名所旧跡と称される風物史跡はありません。そこで隣の町に足をのばし、由緒書きの立札を見たり、土地の古老の話などを総合し、自分の足で歩ける近くの風物史を書くことにしました。

参詣やハイキングなどの折に、参考に出来ましたなら筆者の幸とするところであります。

念徳寺山と呼ばれる由来

現在の野比森崎線（栗田団地前の県道）の道路を岩戸に行く途中、右側に庚申供養塔が建っている。庚申塚の横に入ると久村に出られる市道ながら細い坂道があり、岩戸から登り坂になっていて登りきった頂上にも庚申塚があり、この頂上までを焼木坂とよばれた。この頂上から久村までの下り道を昔から久村坂とよばれている。今は焼失して、なき念徳寺の由来を若き世代に語り伝えるため、庚申塚の横に入った路上から見渡せる右の山並を念徳寺山と呼ぶようになったとの言い伝えがある

念徳寺はなぜ焼失したか

昔念徳寺には、寺宝として金の斧があったと伝えられ、その金の斧を目当てに盗賊が寺に押入ったが斧が見あらず、その腹いせに寺に火を放って逃げたという。また念徳寺跡の土中に金の斧が埋められている伝説も残されているが、その真偽の程はさだかではない。またその頃、三浦一族の武将達が野外の武道場として利用していたと言う場所が現在岩戸の採石場となる以前山合にあり、馬の鞍掛台や、ひげ抜き台などが残っていたと云う。

念徳寺のあった場所

焼木坂のほぼ中間あたり、道路の右側がいま畑になっているその右手の山の上に建っていたと云われている。今はその面影すら残っていない。周囲は大きくなった雑木と竹藪におおわれ大木の山ぐみの木が一本あり、その下側に墓石が一基建っていて時折り季節の草花が供えてあるのがいたく目をひく。この念徳寺は岩戸にある満願寺の末寺と言われ、禅誉上人が隠居していたと云われ、ちょうどその頃弓を持った浪人者が鳥を射歩いていた姿をよく見かけたという。ある日のこと、上人が本堂の前をいつものようにぶらぶら歩いていると、一羽の鴨が鳥の首をくわえて本堂の前にうづくまっているのが目にとまった。そばに寄ってよくよく見ると、鴨は雄鴨の首をく

わえていた。いかにもしょぼりと悲しげの様子である。よく見かける浪人の所業に相違あるまいと、可愛想に思った上人は、よしよし仏果を授けて進ぜようと読経をしてやると、鴨は聴き入るようすにて、やがて経が終ると首を置いたまゝいつこともなくとび去ったと云う。その日の夕方、例の浪人が弓を手に念徳寺にやって来た。寺の者は早速浪人に、上人が鴨にしてあげたことを話して聞かせたところ、浪人は自分のした所業に深く恥じ、心を入れかえ上人の弟子になり、持っていた弓の弦をはづし、矢を切って二度とこのようなことをしないと契い、上弓坊と名乗って仏門の人となり、仏に仕えたと云われ、それ以来、念徳寺のあったあたりから焼木坂の頂上あたりの台地を、矢切りの峰とか矢切りの台などと呼ぶようになったと云う。

清 雲 寺

岩戸を経て佐原交差点を左折し、衣笠インター途中左側に小高い山があり、その山の頂上に清雲寺がある。正しくは大富山清雲寺と呼ぶ、この寺は三浦三代の墓所として多くの人に知られている。この寺は二代為継が開基した寺で、本尊は中国からの渡来仏で滝見観音像である。本堂の一段高い裏手に白壁囲いの廊になっていて、その中に凝灰岩製の五輪塔墓碑が三基仲良く並んで建っている。中央は二代為継、左は初代為通、右が三代義継の墓碑である。

腹切り松の由来

清雲寺の近くに、腹切り松公園がある。その公園内に記念樹の腹切り松があり、この松は昔の松が老枯により替えて植樹された松で、その松の木の下に三浦大介戦死之处、と刻字された記念碑が建っている。治承四年（1180）八月二十六日、源頼朝の源氏再興に味方した三浦一族が当時平氏に属していた武蔵の国の武将、江戸重長、河越重頼、畠山重忠らの率いる三千騎の大軍に攻めたてられ、翌二十七日衣笠城が落城し三浦一族が房総にのがれるという衣笠合戦の際、一族の長であった当時八十九才の大介は衣笠城と運命を共にしたことになるが、いい伝えによれば、落城の混乱にまぎれ運よくのがれ、祖先の霊が眠る円通寺が望まれるこの地の松の木の下で割腹自害を遂げたとの言い伝えが残されている。

佐 原 城 跡

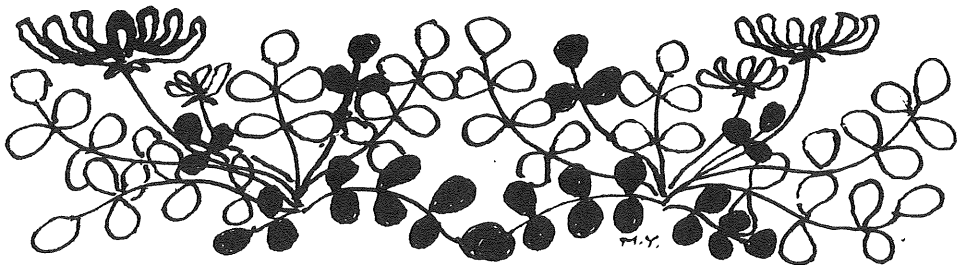
この城跡は岩戸から、佐原交差点に行く途中の左側に常勝寺がある。その反対右側に最近ホテルの宿で知られる岩戸川が流れている。その橋を渡るとすぐ左手に南無妙法蓮華経と刻字した背丈くらいの石が建っている。その道を登りきったところに広い台地があり、そこが城跡だと言う、野球場が出来る位の広さの台地で、いまはススキが茫々と生い茂っている。この佐原城は三浦古尋録によると、佐原十郎の居城と云われ、城跡から遠くは大楠山、衣笠山、森崎などが一望出来る高台であり、昔このあたりを防備する要塞地としての重要地点とされていたと伝えられて

いる。

三浦村名住来言葉

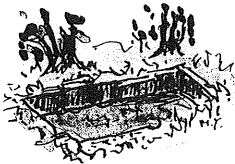
海原の浪も静けき相模灘，陰に三浦の浜つづき，千船百船真帆かけて，出入港の西東，浦賀の町数十ヶ町，谷戸宮下紺屋町，田中蛇畠浜町や，荒井洲崎に新町も，大賀町へ引続く，芝生新巻高均吉井，久比里は磯を伝い来て，大塚小塚灯明堂，尾形浦より検校崎，川間分穂に五百代^{ひろ}，さて下浦の道筋は，八幡久里浜や，浜の真砂路行先は，野比長沢に津久井浜，椅穴今井上宮田，城ヶ島山かがり堂，軒を列ねし家並の，城村過ぎて二町谷，諸磯網代三戸浜の，下宮田和田赤羽根の，向うは長井佐島浦，林大和田長坂も，芦名秋谷は下山口，森戸葉山や堀之内，三が村より小坪村，丘に見ゆるは久野谷なり，逗子桜山池子村，沼間山之根船越や，長浦田浦浦之江^{こう}，逸見横須賀は戻り道，深田中里不入斗，佐野より浜手は久郷村，田津の砂道踏みしめて，山崎大津竹沢も，矢之津の坂を脇に見て，馬堀伊勢町走水，観音崎を腰越や，鴨居の里を山ごしに，浦賀の町を過ぎ行けば，久村佐原に岩戸村，衣笠山にて見おろせば，上武下武須軽谷，高円坊に程もなく，竹の下道帰り来て，大矢部小矢部森崎や，根津神金宗源寺，金谷池上阿部倉は，平作村の続きにて，木古場山口一式の，平松が根に休みなば，はや鎌倉も程近し，三浦の郷の村々を，凡そながら記しつつ，寺手の筆の道しるべと。あなかしこ。

これは吉井の斉藤清太郎氏宅にて発見されたものである。文久元年諸化，斉藤太郎吉と書いてあるだけで，筆者は不明であるとのことである。



粟田のむかし

2-37-13 仲野正美



粟田に昔のものが残っていると言うと、意外にと思われる方も多いのではないのでしょうか。昭和42、43年ごろから開かれた新興団地に文化財など残るはずがないと思われるのも当然でしょう。しかし、この周辺にはいくつかの文化財が人目にもふれず残っているのです。

まず、かろうと古墳です。場所は団地南方の山頂、粟田小と道を挟んだ反対の山です。かろうとは墓の遺骨を納める石室をさしますが、この古墳には盛土がなく、石室が当初から、むき出しになったまま発見されたところから、名付けられたと考えられます。

みなさんは古墳というと、あの仁徳陵（このごろ^{たいせん}大山古墳とも呼ぶ）など濠に囲まれた天皇陵などを思い出されるでしょう。しかし、そんな大きな古墳ではありません。でも、山頂に石室を持ち、山（標高95m）全体を墳丘とみれば、どうして、りっぱな古墳でしょう。

さて、この古墳に埋葬された人はどんな人だったのでしょうか。

まず、神奈川県内の古墳のようすを調べてみましょう。古墳の密集地は大きく3つに分けられます。それは相模川流域、多摩川流域と三浦半島です。弥生時代に始まった米作が盛んになると、川の流域が耕地として多く利用されることから、両河川の流域に古墳が集まることが想像できます。しかし、耕地の少ない三浦半島、久里浜周辺にかろうと山古墳を含め、4基もあったのはなぜでしょう。

それは農耕以外、たとえば水上交通（古東海道は三浦半島から海路で千葉へ）を握っていた濠族であったろうといわれています。この古墳の上に立つと、木の間から海を隔てて房総の山々を眺めることができます。

また、団地の北端に焼木坂があり、この粟田と岩戸の境の道端に^{こうしんとう}庚申塔が10基程ならんでいるのにお気づきでしょうか。

さて、この庚申信仰は、もともと中国から伝えられたもので、人の体の中にいる^{さんし}三尺の虫が庚申（かのえさる）の日に、天帝にその人の悪事を伝え、寿命を縮めるといわれ、人々はその虫が体内から出る日に徹夜して、防いだのが始まりと言われています。平安時代貴族がやったという記録がありますが、江戸時代庶民に広まり、各村々で盛んに行われたようです。また、何年かごと^{こうちゅう}に講中（講の仲間）が協力して造塔したのが、この庚申塔です。村々の境などによく数基並んでいるのを見ることがあります。この庚申塔、専門家の先生のお話ですと、三浦半島は大変に数が多く、また、形態的にも変化に富んでいるそうです。これも周囲を海に囲まれ、各地からの文化が入った証拠だとも言えます。

このように、身のまわりの昔のものから、先人たちの考え方、暮らしぶりを想像することは、
たのしいことではありませんか。

短歌

1-38-7

田口 登志子

公園の花火遊びの子ら去りて
水銀燈は遊具を照らす

虫取りの網を持ちゐる父子連れ
真夏の朝に幾組も見ゆ

葉桜となりし広場にさまざまの
犬集ひ鳴く予防注射日

氏神も社もあらぬこの街を
手作り御輿子ら練り歩く

夜店よりいか焼く匂ひ流れ来て
今宵祭りの公園賑はふ



栗田町点景・六首

1-28-12 福谷 美那子

水仙の黄がいっせいにゆれている
澄み透りたる朝の丘畑

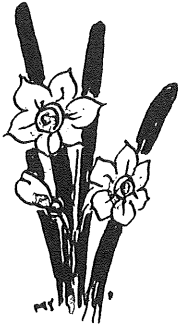
つれている犬に話をする老の
窓下通る同じ時刻に

写さんと子を立たしめし背景に
青麦の畑風に吹かるる

野菜屑ねらふ野良猫歩みをり
無気味に温き大寒の夜

穂芒の日に照らされて騒がしき
光みなぎる川沿いの土手

満潮の空低き海夕焼を
映して広くさざ波の立つ



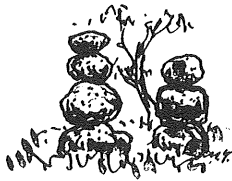
栗田に転居して16年の年月が流れる。当初は、テラスより海がかすかに見えたが、いつのまにか家が混み、折々の風景は変った。

つれづれに、歌を作っているのだから、栗田の町が素材となっているものを抄出してみた。坂の町、海面に映った夕焼、丘畑、老人の孤独、町中をのし歩く野良猫、いずれも親しさは変わらない。横須賀は春が美しいと言った人があるが、遠くに見える丘の街並の白い壁が、夕日に輝くとき、強風の凪いだ後の雲の美しさが山を背景に印象的である。ランドセルを背負った小学生がたくさんいたのだが、鞆の形も変り、子供の遊び声や、けんかをしている声が聞こえなくなって寂しい気がする。

子供の少ない、静かな町になりつつあるのであろうか。この小さな町に、自然と素朴さがいつ迄も残っていく様に祈ってやまない。

周 辺 の 史 跡

1 - 9 - 6 山 本 正 治



粟田周辺の史蹟を、佐原方面から岩戸、粟田、野比方面へと訪ねてみよう。先ず佐原の県道右手に、

○御霊神社 高い石段は江戸時代のもの。御霊神社には祖先の霊を祭ったものと鎌倉権五郎景政を祭ったものと二種類あるが、佐原の場合は後者で佐原十郎義連が祭ったものと言われているが、記録がないので定かでない。

御霊神社と並んで山の中腹に、

○常勝寺 金谷山大明寺の末寺、日蓮宗、宝泉山常勝寺と号す。中興は常勝寺坊日珠、開山は大明寺三世日印聖人。文応年祿の草創、本尊は三宝祖師、鐘楼、古鏡等元祿年中に地震のため破壊、明治19年1月18日当山37代日照上人のとき、本堂脇より出火堂宇を全焼。現在の本堂はその後久村丸山の経塚山千手院の本堂をそのまま移したものだ。三浦半島32か寺の日蓮宗の寺の中で5つに数えられた寺であった。（先年、横々道路佐原インターのため全部改築された）

常勝寺から県道へもどり橋を渡って100米ほど奥へ進むと、

○正覚寺 金谷山大明寺の末寺、日蓮宗、小谷山正覚寺と号す。文安3年常勝寺坊日珠の創建、また元祿16年丹積日法が再興したと伝えられている。常勝寺の住職が兼務する隠居寺で壇家が少ないとのこと。日蓮宗の熱烈な信者加藤清正公が祭られている。須弥壇は江戸時代宝永年間（1704～1710）のもの。

県道へ戻って更に岩戸へ進む。岩戸川を渡って岩戸の旧部落へ入ろうとする右手崖上に、

○巴御前の墓 三浦付近産出の砂岩で鰻頭型のものを重ねたもので、かなり崩れている。近江の国栗津の義仲が最後を遂げるまで行動を共にした巴御前。その後については異説があって明らかでない。和田義盛の側室になった話はあるが、佐原十郎義連とどう結びつけるか推測を拡げるのみである。

旧岩戸を奥へ進むと右側に、

○熊野神社 熊野信仰がこんな山里にと思われるが、海進が進んでいた頃の岩戸を考えるとあなづける気もする。現社殿は内川の水神宮の旧社殿であるとか。

更に奥へ進むと右手に、

○満願寺 佐原十郎義連の発願により建てられた寺。大矢部の満昌寺の末寺の臨済禅寺、かつては七堂伽藍の整った大寺であったという。入口の丸柱には三浦十八番岩戸観音の標識がある。寺は火災に逢い、今の本堂及び庫裡は戦後のもの。裏の観音堂に残された観音菩薩は佐原十郎義連の等身の仏とか。平家討伐に西に向う義連が戦勝祈願で発願し、戦勝と武勲の祈願が満された

ため満願寺と寺号をつけたとか。

観音菩薩と地藏菩薩は国指定の文化財となり、他の2本、不動明王と毘沙門天は市指定の文化財となり、収蔵庫（庫裡の右手）に収められている。三浦氏の興亡の間であって、不思議にもこの文化財が保護されてきたことは、境内に残る礎石の大きさと共に地域の信仰心に支えられたものか。信徒は現在三戸とか。

観音堂の登り口右側に“まずたのむ椎の木もあり夏木立”の句碑は、幕末の浦賀奉行与力中島三郎助の書で芭蕉の句。土地の名主山崎氏及び一族のものと俳句の仲間がおり、文化面で武士と農民が一体であった証拠と言えよう。

堂のわきにある五輪塔は佐原十郎義連の墓と伝えられている。新編相模国風土記稿に「佐原十郎義連墓、観音堂の側にあり、五輪塔なり、高さ7尺、左右に五輪塔六基相竝ぶ。」とある。周囲の瓦塀は寛政年間、三浦志摩守等の修築によるも、長い間の無住時代や廃寺化したことなどもあって荒廃が甚しい。

焼木坂を登りつく手前左側に、

○道祖神 庚申塔と共に八基、もと栗田道脇にあったものを県道改修の折こゝに合設した。庚申しん えと かのえさるは干支の庚申に当る日を重んじ、身をつつしんでこの日を過す信仰。中国の道教には60年或は60日ごとに巡ってくる庚申の夜には三戸さんしの虫が睡眠中の人体から抜け出て昇天するという信仰があった。この虫が天帝にその人の罪過を報告すると、人は命を奪われるから、この夜は眠らずに善を行い身をつつしまねばならないとした。日本の庚申講、庚申待、三十三夜講などはその行事である。

庚申を「かのえさる」と呼ぶことからサルサルの信仰とも結びつき、さらにサルタヒコ（天孫降臨の道案内をつとめた神）との連想から、道を守る道祖神とも習合している。また土地によっては神体を青面金剛としたり、農神としたり、庚申講と云いながら村寄合いや経済的な講となっているところもある。

○かろうと山古墳 栗田小学校の県道を挟んで正面の山の奥、長沢字四っ田にある。谷奥の山田宅の裏山に当る。海拔95m、この山頂の東南端にあつて、一面の篠竹と雑木に覆われ、不明瞭な墳丘である。

水磨きの切石の組み合わせの石室は、側壁が大小12枚の切石で、南北230cm、東西77cm、深さ80cmに組み合わされている。

年代は明確ではないが、大化墓制の影響を受けた石室であることが考えられ、切石組み合わせ石室などから奈良時代中期か後期のものと推定される。いづれ古墳の主は三浦半島有数の豪族であったに違いない。

天井石（蓋）は現存しないが、石室内から発見された鉄片、金銅片等は市の博物館に展示されている。

粟田の県道を更に南へ下る。十字路の手前左奥に、

○**称名寺** 醉蓮山称名寺、三浦三十三観音十一番札所、昭和45年46年と二度の火災に遇い、現在はコンクリート建築。本堂左手の観音堂は明治時代の建立、幸い焼失をまぬがれた。いわゆる「腹籠り観音」が安置され、古くから安産のご利益があらたかと伝えられている。

古くは真言宗大塔院と称し、観音堂と共に千駄ヶ崎にあったと伝えられ、貞永年間（1232～1233）に時の僧了法が親鸞に帰依して浄土真宗（西本願寺派）に改宗し、寺号も称名寺と改められた。それから200年後の嘉吉年間（1441～43）に大嵐と火災によって壊滅したので現在地に移したと言われる。その火災により観音堂の灰の中から観音像の首だけが残って出たので、その首を新作の観音像のお腹の中に納めたと言われ、右手がお腹にあてがわれている。即ち「腹籠り観音」或は「灰中出現の霊像」と言われる所以である。

称名寺の高い石段の前の道を少し奥へ進んだところに、

○**最蔵寺** 光照山最蔵寺、浄土真宗、開基開山是最善坊徳林上人。貞応元年（1222）の草創で、当時は最善坊と称し天台宗の寺で野比地区最古の寺院であった。正応元年（1288）浄土真宗に改宗。伝えによると徳林上人は元、禁裏北面の武士だったと言われている。本尊の阿弥陀如来は江戸時代の作で、他に恵信僧都作と伝えられる鎌倉時代の阿弥陀如来も安置されている。

最蔵寺から更に先へ進んだ左手奥に、

○**最宝寺** 五明山最宝寺、浄土真宗。寺伝によれば、建久六年（1195）に源頼朝が鎌倉の弁が谷に一寺を創建し、翌七年に宮中の高御蔵に安置してあった行基作と伝える薬師如来の坐像を頂戴して本尊とした。それ故寺名にも特に高御蔵を付けたのだとのことで、頼朝は自分の従兄に当る明光上人をこの寺の第一世の住持とした。明光は後に親鸞上人に帰依し、浄土真宗に改めた。九世明心法師の時、北条氏の真宗弾圧が始まったので、鎌倉から野比の兼帯所に移って来たと言われている。その本尊として祀られたという薬師如来の像は、今では別に祀られ阿弥陀如来像が本尊になっている。この薬師如来の像は昭和41年、県の重要文化財に指定された。

野比駅前から134号線に出る。長沢方面へ向う途中野比橋を渡った頃から左に東京湾が開け、砂浜が細長く続きやがて道路の左側に大きな碑が見えてくる。

○**若山牧水夫妻の歌碑** この地の観光協会が昭和28年の文化の日に建てたもの。

海に面して

しらとりはかなしからずやそらの青海の青にもそまらずたよふ

裏の道路に面しては喜志子夫人の歌

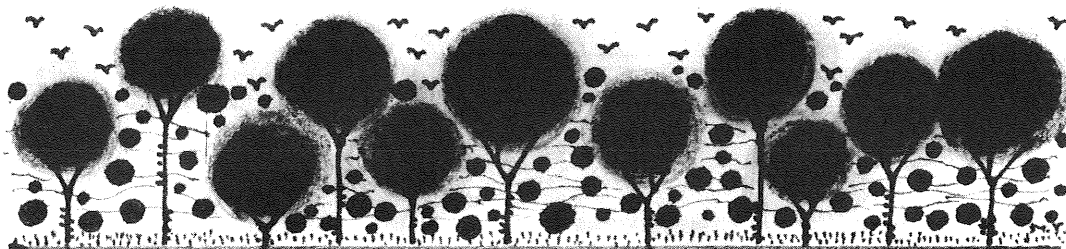
うちけぶり鋸山も浮び来と今日のみちしほふくらみ寄する

大正4年3月に病後の夫人の静養のため、家族3人で長沢の借家に移り住んだ。1年9か月の滞在だったという。その跡は何も残っていない。

野比中村に海に向った社がある。

○白髭神社 祭神の猿田彦命は日本の草創の頃、天孫降臨の際に瓊々杵命を先導したと伝えられる。創建年代は不詳、大和西国との往来が盛んになった頃、我が国最古の由緒ある近江の白髭神社の祭神を勧請し、波荒い千駄が崎の海上安全と人々の守護安泰を祈念する社として、また当地の鎮守として祀られたものと考えられる。

更に社伝によると、寛政八年（1631）頃は富塚山南麓^{とがやま}にあり、元禄四年（1691）に再建され、初めは山の頂上辺りにあったが、江戸初期に現在地に移されたらしい。野比地区にも浦賀と同様に「虎踊り」が伝えられている。例祭日は毎年7月15日前後の日曜日となっている。又、社殿背後の富塚山の南麓社叢林は県の天然記念物に指定されている。



粟田音頭

作曲 小林 淡 動

ハ アー ノ ビノー キター ヤー アー

マミド リニ ハアー エテー ヨー ヤー ナーミ

アラ タニ アカルイ エガ オ (ソレ) コ コハ

ア ワー タ アー ヨー コ コハ

アワ タヨ ア ワタ スムー マチ イー コ

ウー マー チー (サテ) ホ ソニ

ホヤー サノ ヤレ コー ノ セ

粟 田 音 頭

作詞 山 本 正 治

1. ハァー

野比の北山緑に映えてヨー
家並新たに明るい笑顔
ソレ、ここは粟田よここは粟田よ
粟田住む町憩う町
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

2. ハァー

花は五色に色かえながらヨー
うつぎ花咲く丘めぐらせて
ソレ、ここは粟田よここは粟田よ
粟田明るい花の町
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

3. ハァー

みんなそろうたあなたとわたしヨー
移り住んだら都も同じ
ソレ、ここは粟田よここは粟田よ
粟田育ちの君と僕
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

4. ハァー

老も若きも輪に輪を重ねヨー
踊る手拍子踏む足拍子
ソレ、ここは粟田よここは粟田よ
粟田人の輪踊りの輪
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

5. ハァー

あちらの山できじばと啼けばヨー
こちら恋しとすぐ啼き交わす
ソレ、ここは粟田よここは粟田よ
粟田小鳥の唄う町
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

6. ハァー

遠い故郷を夜空に偲びヨー
人の情を手と手につなぐ
ソレ、ここは粟田よここは粟田よ
粟田人の和星の町
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

町 内 会 旗

昭和50年、町内会も戸数800を数える程に発展増大して来た。

町内会の象徴としての町内会旗をつくったと云うことが話題にのぼり、昭和50年5月の理事会で町内会旗の図案を一般町内会員より募集することに決定した。

募集の中から検討協議により巻頭の写真の通りきまり、昭和50年8月、正副2旗作製し立派な粟田町内会旗が出来た。

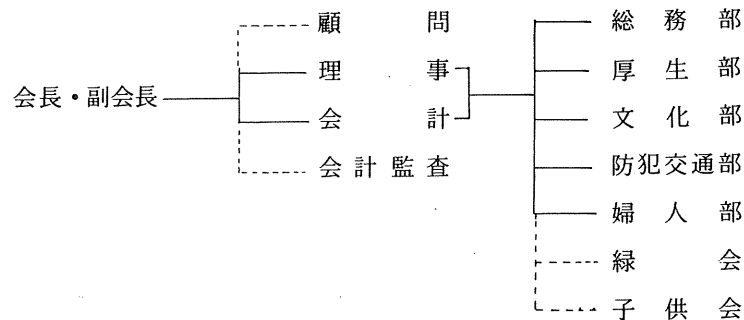
(正)

生地は濃い緑
図案と房は黄色
粟田町内会は白く染抜いてある
製作費 88,000円

(副)

生地は濃い緑
房はなく図案黄色
粟田町内会は白く染抜いてある
製作費 19,000円

町内会の組織



定例理事会（毎月第3日曜日10：00～12：00）には緑会と子供会の代表が参加する

各部の活動

総務部

1. 総会，理事会会議録の作成
2. 町内会だよりの発行
3. 敬老祝賀会行事の実施
4. 成人者に記念品の贈呈
5. 中学卒業者に記念品の贈呈

厚生部

1. ゴミ類の管理及び看板の点検，補修
2. 各種共同募金の協力集金業務
3. 町内レクリエーションの企画と実施
4. その他保健衛生，福利厚生に関する事業

文化部

1. 納涼大会の企画と実施
2. 文化祭の企画と実施
3. 栗田学区体育振興会への参画
4. 青年のつどいの企画と実施
5. 中学生のつどいの企画と実施

防犯交通部

1. 防犯街路灯の整備補修
2. 町内交通標識等の調査整備補修
3. 不在地主所有地の除草要請
4. 交通災害共済保険団体加入手続き
5. 納涼大会への協力及び道路使用許可申請
6. 交通安全運動のキャンペーン
7. 暴走族及び非行青少年の取締り要請
8. その他町内に必要な防犯活動

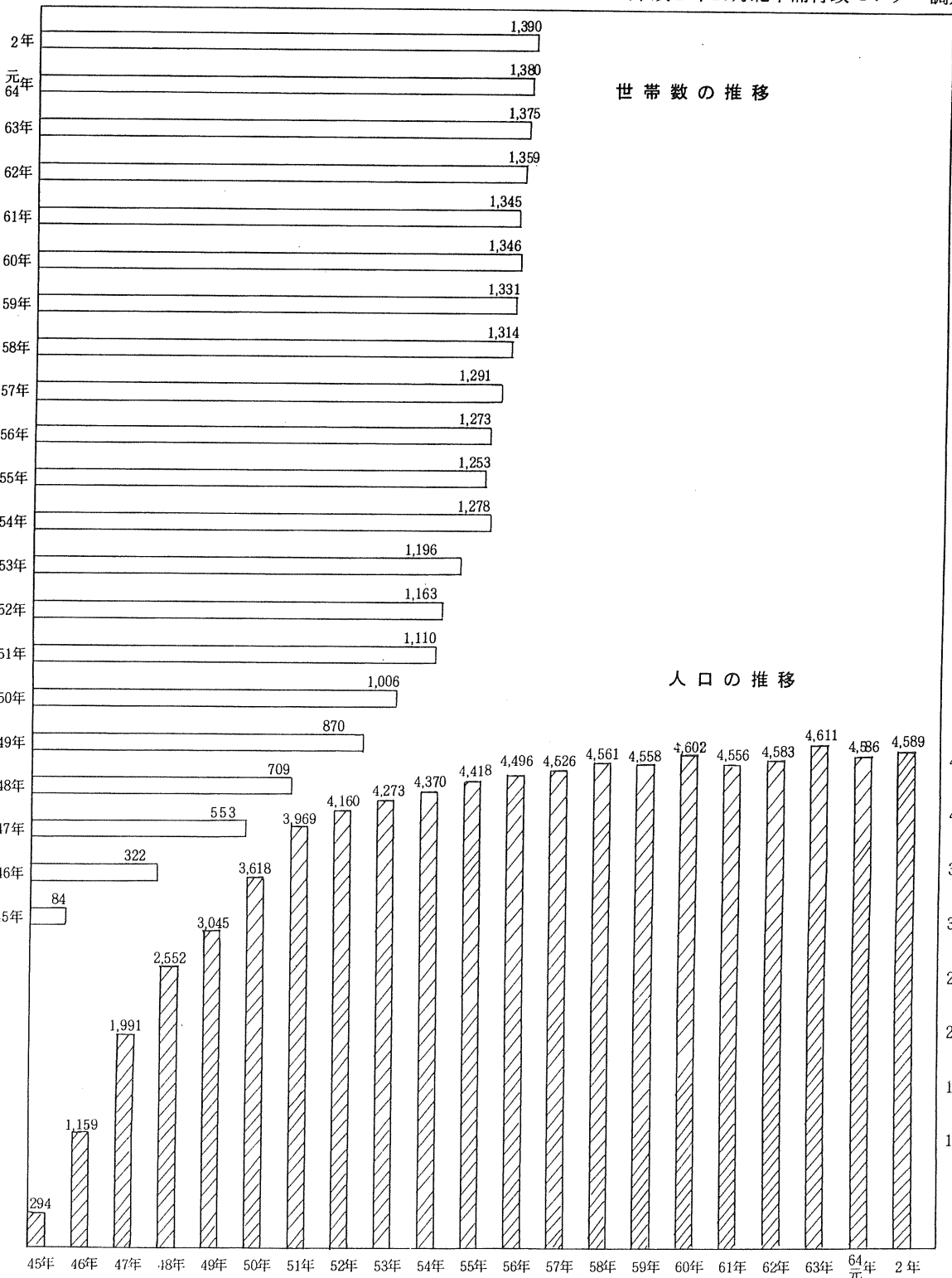
婦人部

1. 町内会主催行事に協力
2. 講習会の企画と実施
3. 町内各地区懇談会の開催
4. 物品販売の幹旋
5. 栗田バス停周辺の清掃に協力
6. クリーンヨコスカの行事に協力
7. 交通安全母の会の行事に協力

世帯数と人口の推移

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

(平成2年10月北下浦行政センター調)



同好会・その他地域の社会活動

粟田の同好会

(1990年現在)

- 緑会ゲートボール部
- 緑会囲碁部
- 緑会茶道部
- 緑会踊り部
- 書道同好会
- 煎茶芙蓉会
- 粟田フォークダンス同好会
- 盆栽愛好会
- 卓球同好会
- 柔軟体操同好会
- パープル・ステップ（ソーシャルダンス）
- フォークダンス（年長）
- ヤングファイターズ（野球）
- 釣同好会
- 大極拳の会
- 大正琴の会
- 女性詩吟同好会
- 詩吟の会
- 民謡の会
- 粟田俳句会
- 囲碁同好会
- 舞踊仲よし会
- 粟田耕作会

その他地域の社会活動

- ・防犯指導員
- ・防犯連絡員
- ・民生委員
- ・福祉推進員
- ・粟田学区体育振興会
- ・粟田学区公民館
- ・粟田青少年活動推進の会
- ・社会福祉協力員
- ・自主防災指導員
- ・岩戸地域自治活動センター運営管理委員会
- ・粟田水曜会
- ・粟田月曜会
- ・青少年指導員
- ・青少年相談員
- ・交通安全母の会
- ・粟田おてつだいの会
- ・16ミリ試写室南地区
- ・クリーンよこすか委員会
- ・防災行政無線子局監視モニター
- ・粟田地区テレビ共同受信組合

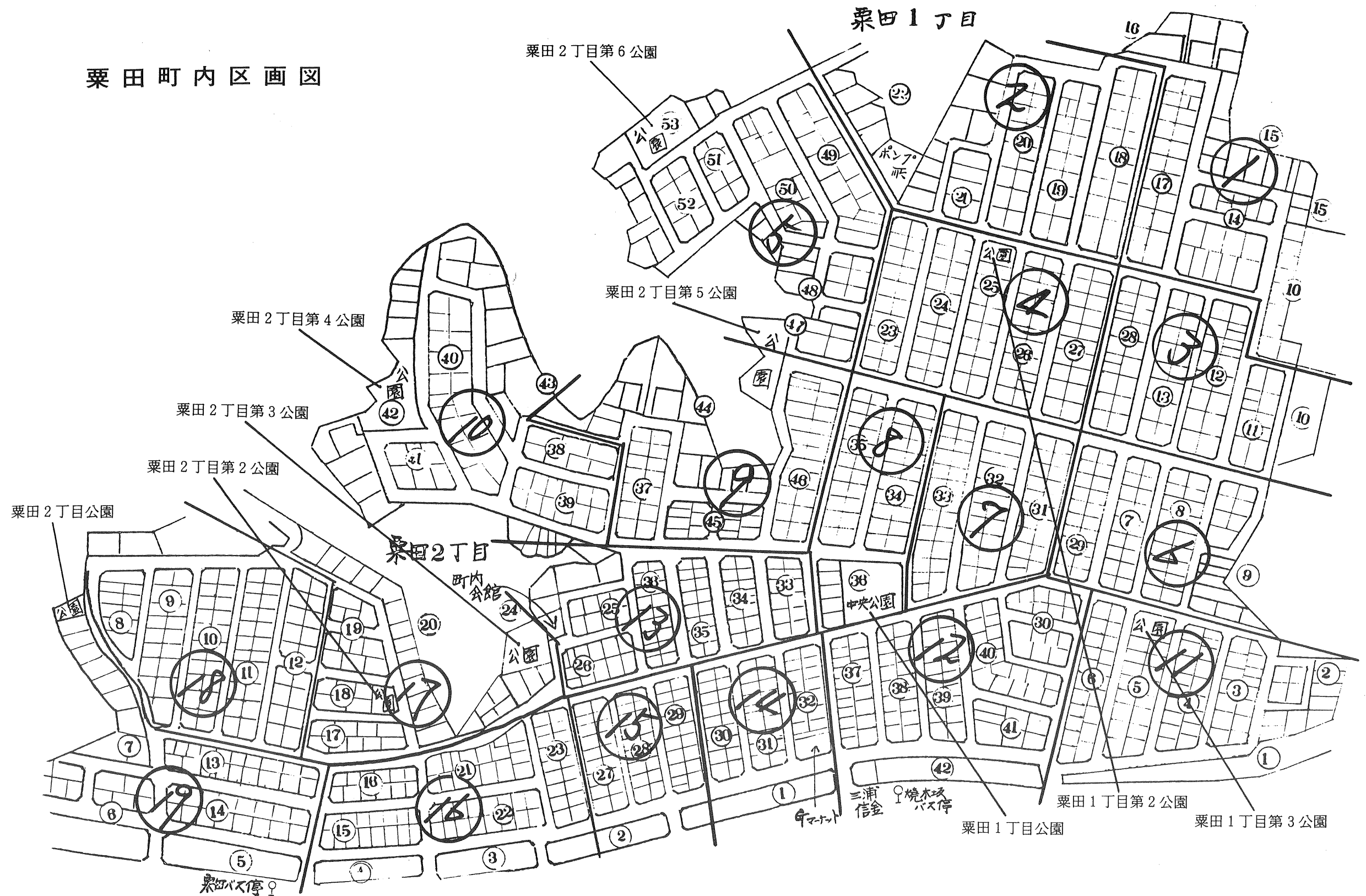
この他、井戸端元気の会をはじめ、市内の各種のボランティア活動に入って、奉仕活動をされている方がたくさんいます。

町内会の財産目録

1990 . 3 . 31 総務部

番号	品 目	数 量	備 考
1	ガラストーブ	4	
2	物 置	1	
3	会議用テーブル	29	足高 2, 緑会寄贈 5
4	折りたたみ椅子	12	
5	町内会旗 (正)	1	
6	” (副)	1	
7	土 地	166.7 m ²	地目山林
8	扇 風 機	5	
9	カセットラジオ	2	
10	物 置	1	
11	書 庫 (スチール)	3	
12	紅 白 幕	3	商店会寄贈 1
13	携帯マイク	1	
14	町内会館	1	木造二階建て
15	黒 板	2	
16	避難梯子	1	
17	天 幕	2	
18	ハ ッ ピ	50	内商店会寄贈10
19	三浦信金へ出資金	1 口	30, 000 円
20	テレビ(栗田地区テレビ受信組合寄贈)	1 台	
21	納涼大会用櫓資材	1	丸太・板等
22	リコピー機 FT-4630	1	専用台含む
23	補助椅子	5	
24	ナンバーリングBB型	1	
25	履物入れ	1	
26	キャタツ	1	
27	茶ダンス	1	
28	掃 除 機	2	寄贈品
29	消 火 器	4	
30	暖冷房機	1	

栗田町内区画図



町内会年度別役員表

年度 期 間 役 職	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	昭和64年 平成元年	平成2年	備 考
	45. 1.18～ 46. 3.31	46. 4. 1～ 47. 3.31	47. 4. 1～ 48. 3.31	48. 4. 1～ 49. 3.31	49. 4. 1～ 50. 3.31	50. 4. 1～ 51. 3.31	51. 4. 1～ 52. 3.31	52. 4. 1～ 53. 3.31	53. 4. 1～ 54. 3.31	54. 4. 1～ 55. 3.31	55. 4. 1～ 56. 3.31	56. 4. 1～ 57. 3.31	57. 4. 1～ 58. 3.31	58. 4. 1～ 59. 3.31	59. 4. 1～ 60. 3.31	60. 4. 1～ 61. 3.31	61. 4. 1～ 62. 3.31	62. 4. 1～ 63. 3.31	63. 4. 1～ 1. 3.31	1. 4. 1～ 2. 3.31	2. 4. 1～ 3. 3.31	
会 長	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	岡 健治	岡 健治	近藤 幸雄	近藤 幸雄	近藤 幸雄	近藤 幸雄	
副 会 長	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	近藤 幸雄	後藤 常正	加藤 正元	加藤 正元	山本 正治	山本 正治	山本 正治	星野 昭二	星野 昭二	小室 隆章	小室 隆章	
	本間 茂夫	本間 茂夫	八木沢嘉一	八木沢嘉一	大竹 庸悦	大竹 庸悦	大竹 庸悦	大竹 庸悦	近藤 幸雄	近藤 幸雄	後藤 常正	岡 健治	岡 健治	岡 健治	岡 健治	木村 文雄	佐藤 公彦	倉持 辰治	横関 昭一	泉 芳光	江上 一雄	
会 計	熊井 則彦	加藤 正元	加藤 正元	原田 富夫	田中 芳之	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	加藤 正元	加藤 正元	倉持 辰治	倉持 辰治	倉持 辰治	高石 武	高石 武	高石 武	高石 武	丹沢晃一路	丹沢晃一路	
	大野 用博	原田 富夫	原田 富夫	田中 芳之	今井フナ子	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	倉持 辰治	倉持 辰治	篠崎 幸生	篠崎 幸生	篠崎 幸生	篠崎 幸生	篠崎 幸生	工藤 研二	丹沢晃一路	小原 信男	小原 信男	
会 計 監 査	大竹 庸悦	笠原 安治	横山 民徳	長尾 参治	黒田 嘉男	黒田 嘉男	黒田 嘉男	小原 昇	小原 昇	山内 章孝	山内 章孝	山内 章孝	八木 清暉	八木 清暉	八木 清暉	星野 昭二	星野 昭二	福井 隆雄	福井 隆雄	福井 隆雄	篠崎 幸生	
	高橋 欣也	牛久保祐治郎	善 吉一	加藤 正元	戸倉 鎮雄	戸倉 鎮雄	戸倉 鎮雄	小池 豊	小池 豊	高梨 進	高梨 進	高梨 進	種橋 正亘	種橋 正亘	種橋 正亘	倉持 辰治	福井 隆雄	篠崎 幸生	篠崎 幸生	篠崎 幸生	高石 武	
顧 問					八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	成田金治郎	木村 文雄	山本 正治	山下 勉生	山本 正治	山本 正治	
					山本 正治	山本 正治	山 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	加藤 正元	加藤 正元	近藤 幸雄	山本 正治	山下 勉生	星野 昭二	星野 昭二	
理 事	区	・注 総一総務部 文一文化部 厚一厚生部 防一防犯防火部 交一交通部 婦一婦人部……………（ ）内の表示は担当の役職を示す。 ○印は各部の部長を示す。																				
	1	笠原 安治	善 吉一	⊗長尾 参治	大竹与四郎	小池 豊	前田 敏	Ⓐ飯田伊佐男	永井 昭	佐久間政志	三浦 富雄	橋本 九郎	橋本 博幸	土屋 満徳	山本 勝	⊗星野 昭二	高橋 則雄	畑 九二夫	丹沢晃一路	岡田 主	鈴木 静夫	内田 恒男
	2	Ⓐ加藤 正元	Ⓐ長谷川久治	榎本与三郎	上野 信行	細江 次郎	内田 伊彦	宮川 亀雄	坪井 浩	高橋 久雄	牧野 進	高橋 秀夫	児玉 信雄	中島 章	Ⓐ斉藤 勝則	加藤 治男	佐藤 勇夫	佐々木春夫	藤田 功	佐藤 辰蔵	半沢 透	鈴木 菊司
	3	八木沢嘉一	八木沢嘉一	岩内 秀行 高橋 英次	依田 親治	石山 省三	田中 成雄	小曾根 徳	見上 毅	大友 二郎	勝沼 昭	渡辺 庸八	勝沼 昭	東條 武尾	赤羽 俊八	佐藤 忠	岸 武幸	佐藤 三男	遠藤 惣市	田所 肇	横井 清司	小沢 弘
	4	Ⓐ塩満 嘉夫	牛久保祐治郎	渡井 信吾	Ⓐ山下 光久	飯塚 光正	田中 弘三	大橋 洋	田辺 行雄	山田 勝	原田 道夫	福田 勇三	斉藤 時治	平津 孝尚	佐藤 文俊	白須 吉男	佐藤 公彦	相馬義八郎	山下 勉生	葛西 勝美	平田 吉雄	中川 清吉
	5	徳本 米蔵	原田 富夫	Ⓐ正田 賢吾	米山 昭雄	小原 昇	栗木 邦雄	古川 計介	平戸 重男	長門 謙一	石田 長勲	小松 一雄	五味富海夫	嵯峨野英次	椎野 佛一	井上 富雄	木村 文夫	伊藤栄二郎	渡辺 文男	長沢 敏	水野 光雄	大野 泰雄
	6	石ヶ谷若松	⊗高橋 謙介	清水 清	戸倉 鎮雄	山崎 保雄	三輪 美薫	色川 幸市	浪形 金治	志賀 昭久	大塚 弘	河野 孝治	鈴木 誠	奥 阿久	堀 輝次	竹内 操	松下 洋二	畑山 勝男	田中 修蔵	金沢 広志	高橋 豊	佐藤 謙二
	7	蓬田 与市	Ⓐ蓬田 与市	宮武 克明	平松 功	⊗藤仲 博己	荒川 庸夫	浅見 輝夫	大懸象治郎	橋本 幸男	山下 啓介	高橋 和雄	込山 貞昭	中川 保次	佐藤 鉄美	佐川 孚	勘場 斉	金子 泰三	瀬戸山耕三	手代木速雄	増田 重晴	徳井 澄
	8		横山 民徳	山岸 孝慶	夏原 浩	坂本 繁夫	堤 章	逸見 義一	高橋 洵	梶原 泉	根崎 稔	大島 健二	加藤 俊雄	奥村 孝司	酒井 宏	木村 文雄	福井 隆雄	坂田 章	宮川 信一	斉藤 暢弥	加藤 進	植村 敬
	9			秋場 重雄	出口 勇	佐藤 隆幸	坂口 峰雄	鶴田 秀雄	鈴木 美幌	沢田 満義	山下 邦雄	伊藤 健一	八木 清暉	荒井 幸治	石渡昭次郎	竹井 正夫	菊田 敏	小室 俊雄	藤田 明	横田 進	高橋 照雄	高柳 光男
	10			Ⓐ曾我 二郎	大森 清	松木 士郎	川部 暉正	小林 弘人	林 武男	山内 章孝	倉持 辰治	大野 晃	橋内 常雄	岡部 公一	横山 実	大塚惣一郎	及川勝治郎	赤間 良美	岩 勝典	小原 信男	松本 良治	小沢 純夫
	11				⊗黒田 嘉男	⊗後藤 常正	稲毛 政一	⊗高梨 進	児玉 三郎	大野 幸一	継 茂	青木 茂	堀井 英雄	鎌倉 光男	沼尾 豊夫	播正 誠	中西 正	萩原 ヤエ	服部 弘	江上 一雄	川本 ミヤ	岩瀬 義雄
	12				藤平 実	駒崎 明	加藤 毅	田口 翼	⊗海藤 忠夫	植竹 義夫	山田 善久	高橋 精次	蒲沢 宏夫	飯島 敏伸	沼田 勝宏	水上 幸彦	杉山 稔	田島紘一郎	妻木 裕東	⊗小室 隆章	細田 好	Ⓐ北山 秀雄
	13				⊗飯島 通	渡辺 良香	⊗松本 英也	佐藤 政則	Ⓐ本田 増博	土屋寅次郎	菊地 安司	水野 賢	種橋 正亘	堀川 敏治	中村 章弘	井戸 敏彦	桜井 孝一	清水 新吾	井口 富平	亀田 正雄	Ⓐ高橋 金三	吉野 敏弘
	14				土屋 三郎	杉浦謙次郎	川内 惣助	⊗宮内紘一郎	秋元 英也	⊗鈴木 勲	有賀 富寿	梶川 弘	Ⓐ中沢 武夫	坂部 敏文	名塚 清一	Ⓐ小野 正	丸上 幸成	⊗中村 好勝	笹川 洋和	Ⓐ泉 芳光	Ⓐ山田 耕従	⊗西田 真二
	15					鈴藤 次夫	柴田 尚輝	Ⓐ高橋 幸松	波田野 滋	浜田 和夫	⊗宮田 盛雄	岡 健治	加藤 春治	志村 誠一	平塚 松重	沢登 民雄	⊗田島 満夫	⊗内山 克之	Ⓐ宮沢 崇夫	山田 文男	Ⓐ森山 逸夫	Ⓐ長谷川隆司
	16						⊗中村 斉	⊗宮坂 輝久	Ⓐ近藤 幸雄	川口 敏之	Ⓐ林 政芳	早乙女好司	後藤謙次郎	Ⓐ田崎 幸夫	Ⓐ桑島 馨	Ⓐ山田 隆	佐野 菊男	土山 和夫	Ⓐ伊藤 嘉一	森宮 和夫	Ⓐ佐藤 馨	Ⓐ木村木代光
	17						Ⓐ小林 実	⊗渡辺 徳彦	Ⓐ佐藤 貞男	森 敏郎	津村 茂	Ⓐ高橋 勝義	Ⓐ高橋 敏夫	Ⓐ御殿谷敏勝	Ⓐ風間 勝利	Ⓐ中村 睦夫	平賀 真一	Ⓐ桜井 忠三	Ⓐ横関 昭一	住岡 明一	Ⓐ鈴木 泰	Ⓐ渡辺 孝一
	18						Ⓐ森 英治	Ⓐ柴田富二郎	⊗柴田小太郎	⊗島崎 信芳	Ⓐ小野寺一男	Ⓐ今橋 新一	Ⓐ寺田市太郎	Ⓐ美濃 武男	Ⓐ吉沢 敏夫	Ⓐ阿部日出男	Ⓐ松永 秀雄	Ⓐ松島 澄男	Ⓐ志村 正雄	Ⓐ田島 昌幸	Ⓐ宮川 勝	Ⓐ増田 豊
	19						Ⓐ田中 巖	Ⓐ浜田 道夫	Ⓐ松島 弘	Ⓐ山本 文彦	Ⓐ篠崎 幸生	Ⓐ小沢 馨	⊗山口 健二	Ⓐ田辺 庄一	⊗松本 孝守	Ⓐ小谷 忠	⊗能登 正昭	Ⓐ佐藤 兼広	Ⓐ井上 正三	Ⓐ斉藤不二男	Ⓐ郡司 好富	Ⓐ田中 巖
婦人部長		竹内 キノ	笠原 節子	平戸 藤枝	中村 春子	山本恵理子	木村富士江	小室 乃美	真壁 浜子	山本 由子	上村 徳子	大矢 和子	堀 規矩子	菅原とも子	逸見 和恵	開田 英代	山田日出子	栗原 陽子	菅原 幸子	関根 静江	高橋キミヨ	
老人会長 (緑会)		鈴木 米作	鈴木 米作	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	宇津見 喬	宇津見 喬	伊森 精	伊森 精	伊森 精	加藤 春治	加藤 春治	加藤 春治	加藤 春治	加藤 春治	
子供会長	石ヶ谷若松	宮沢 幸子	志賀 康子	小山路得子	小室 乃美	小倉イソ子	岡部 澄子	梅沢千百合	奥村美代子	宇津見敏子	星野美由起	樋口 伸枝	竹内 博子	竹内 博子	庄司 敏子	戸矢喜美子	小川 尚子	沢田 裕子	服部 美子	柏樹 友子	竹川 高子	

お わ り に

梅・桜・さつき・小手まり・木せい・さざんか。家並みを飾る四季の花。

うぐいす・山鳩・蝉・こおろぎ。心をやわらげる自然の楽士達。

若葉・紅葉・舞う枯葉。

豊かな自然に抱かれて、栗田の町は育ち、町内会は発足20周年を迎えた。町の生い立ち、町を取り囲む自然、近隣に点在する先人の遺跡と遺産、栗田の今を生きる人々の集いの様、息吹き、そして未来への夢を盛り込んで、「町のあゆみ」を編む。

執筆、資料提供と惜しみないご協力をいただいた多くの方々に支えられて、本誌が上梓出来たことに心から御礼申し上げたい。

スポーツに文化面にと、次代を担う町の子どもの活躍の報を聞く。町内会発足20周年目の、この子達のためにもより良い町づくりをめざす新たなあゆみの始めの年となるよう、祈って稿を終る。

中 村 齊

平成3年2月

(資料提供者)

加 藤 正 元
坂 本 繁 夫
仲 野 正 美
山 本 正 治
岡 健 治
小 原 信 男
田 口 登志子
塩 満 嘉 夫
福 谷 美那子
丹 沢 晃一路
小 林 淡 動

(編 集 委 員)

近 藤 幸 雄 中 村 齊
小 室 隆 章 加 藤 春 治
江 上 一 雄 田 中 巖
丹 沢 晃一路 小 沢 弘
小 原 信 男 徳 井 瀧
山 本 正 治 小 沢 純 夫
岡 健 治 長谷川 隆 司
星 野 昭 二

— 敬称略・順不同 —

ご協力ありがとうございました。

わがまちあわた 20周年記念

平成3年2月発行

編集・発行 粟田町内会

代表 近藤幸雄

印刷所 三邦印刷(桜井忠三)

茅ヶ崎市南湖1-8-19

TEL 0467-85-1667

